

TR-I-0220

協調的な目標指向型対話における文形式と発話者の意図との対応
- 文形式を重視した情報伝達行為の分類 -

Connections Between Surface Sentence Forms and Speaker's Intentions
in Cooperative Task-Oriented Conversations

- Classification of Communicative Acts Relied on Surface Forms -

定延利之*

山岡孝行

飯田仁

Toshiyuki SADANOBU Takayuki YAMAOKA Hitoshi IIDA

1991.3

概要

発話された文の意味を考えると、[文形式]と[発話者の意図]とを結びつけることに他ならない。しかし単一の[文形式]で様々な[発話者の意図]を伝達できたり、また単一の[発話者の意図]が何通りもの[文形式]で伝達できたりと、結びつきの実態は複雑である。情報伝達行為とは、[文形式]と[発話者の意図]とを結ぶ重要な概念である。本研究では、相対的に処理が容易と思われる協調的な目標指向型対話を考察対象として、発話が果たす基本的な情報伝達行為を分類し、発話理解と談話構造構築の礎としたい。情報伝達行為の分類においては、形式面からの要請・意味面からの要請という2種の要請があるが、本研究では形式面からの要請を特に重視して情報伝達行為を分類する。さらに発話クラスターおよびアクション・ハイアラーキー構築のためのごく基本的な記述を行う。

ATR 自動翻訳電話研究所

ATR Interpreting Telephony Research Laboratories

© (株) ATR 自動翻訳電話研究所 1991

©1991 by ATR Interpreting Telephony Research Laboratories

*京都大学文学部 (現在、神戸大学教養学部)

目次

1	はじめに	1
1.1	本研究の目標	1
1.2	本研究の効果	1
1.3	本研究が前提とする概念の説明	2
1.3.1	4階層プランモデル	2
1.3.2	情報伝達行為	2
1.3.3	発話クラスター	3
1.3.4	発話スタック・スタック発話	4
1.3.5	間接応答	5
2	情報伝達行為と発話クラスターの紹介	7
2.1	情報伝達行為の一覧	7
2.2	発話クラスターのパターン一覧	10
2.3	スタック発話のパターン一覧	13
2.4	間接応答のパターン一覧	15
3	情報伝達行為の分類	18
3.1	ダイアログプランに関わる情報伝達行為	18
3.1.1	GreetingOpen	19
3.1.2	GreetingClose	20
3.1.3	Aiduchi	20
3.2	コミュニケーションプランに関わる情報伝達行為	21
3.2.1	Demand Class	21
3.2.1.1	文末形式以外の特徴的文形式	21
3.2.1.1.1	[必須格名詞句を主題にできるか]	22
3.2.1.1.2	[必須格名詞句を対比できるか]	23

3.2.1.1.3[主語を中立叙述の「が」で受けることができるか]	23
3.2.1.1.4[主語を総記の「が」で受けることができるか]	24
3.2.1.1.5[文末に「ノダ」が生起できるか]	24
3.2.1.1.6[文頭に「では」が生起できるか]	25
3.2.1.2 Action の動作主性	26
3.2.1.3 Action 遂行の即時性	26
3.2.1.4 願望表現との共起	27
3.2.1.5 Ask 行為の即時性	28
3.2.1.6 条件付要求	28
3.2.1.7 動作主の明示	29
3.2.1.8 Confirm と Ask	29
3.2.1.9 Confirm/Ask と Request	29
3.2.1.10 Confirm/Ask と拒否応答	30
3.2.1.11 Suggest/Offer 系列	30
3.2.2 Response Class	30
3.2.2.1 YES/NO 代用と省略	31
3.2.2.2 否定疑問の応答	32
3.2.2.3 複数(並立)要求と応答	33
3.2.2.4 YES/NO 応答と発話スタック	33
3.2.2.5 Confirm による間接要求への応答	34
3.2.2.6 応答の話題の属性	34
3.2.2.7 Request Promise-Action と Inform-Action	36
3.2.3 Confirmation Class	36
3.2.3.1 Understand	36
3.2.3.2 Yorosiku	37
3.2.3.3 Zannen	38

目次	iii
4 発話クラスター	39
4.1 関連するプランによる特徴	39
4.2 情報伝達行為の曖昧性の削除	39
5 スタック発話	41
6 特定の情報伝達行為を果たす節にしか生起しない語句	42
7 情報伝達行為と文形式との対応規則	47
8 対応規則の評価	57
8.1 調査方法	57
8.2 評価	57
9 サンプル対話の提示	58
10 おわりに	64
参考文献	65

1 はじめに

この章では、本研究の目標・効果・前提を述べる。目標を1.1節、効果を1.2節、前提を1.3節で述べる。

1.1 本研究の目標

発話された文の意味を考えると、[文形式]と[発話者の意図]とを結びつけることに他ならない。しかし単一の[文形式]で様々な[発話者の意図]を伝達できたり、また単一の[発話者の意図]が何とおりの[文形式]で伝達できたりと、結びつきの実態は複雑である。

情報伝達行為とは、[文形式]と[発話者の意図]とを結ぶ重要な概念である。本研究では、相対的に処理が容易と思われる協調的な目標指向型対話を考察対象として情報伝達行為を分類し、文意理解および談話構造構築の礎としたい。

具体的にいうと、本研究は考察対象となる対話を、下の1-4を全て満たす対話の中でも「国際会議の参加に関する(質問者と事務局との)問い合わせ対話」に限定し、結びつきの実態を可能な限り枚挙的に探るものである。

1. 発話は、協調的な目標指向型の対話を構成する。
2. 各発話者(質問者および事務局)は合理的な判断力をもつ。
3. 対話は1人対1人でキーボードによって行われる。
4. 発話者間に、知識や判断の齟齬(そご)は無い。¹

1.2 本研究の効果

本研究の本来的な効果としては下記1が考えられるが、1の他にも、たとえば2,3等が効果として挙げられる。

1. 発話クラスターおよびアクション・ハイアラキー構築のための基本的な領域が明らかになり、対話構造解析に際して、一貫性の高い入力を得られる。
2. 対話構造解析の際、可能な構造のあり方が絞り込める。
3. 文脈を手がかりとして次発話の表層形式を予測する際、表層形式の候補生成に役立つ。

¹但し「国際会議の参加に関する問い合わせ対話」において、事務局と質問者の立場が均等であると主張するつもりはない。たとえば事務局がRequest-Actionの発話をしにくく、質問者がOffer-Actionの発話をしにくいことは軽視できない。

1.3 本研究が前提とする概念の説明

この節では本研究が前提とする、いくつかの概念をごく簡単に説明しておく。

1.3.1 4階層プランモデル

ここでいう「プラン」とは、ごく簡単にいうと、行動を行う際の手順を指す。たとえば料理を作る際のレシピも、こうしたプランの一つといえる。(多かれ少なかれ)意図に基づいた人間の行動を、プランの実践と考えると、人間が行う対話という行動もプランの実践に他ならないことになる。

対話をつかさどるプランは複雑であり、これは分かりやすいように、4つのプランに分けて考えられる。以下、4つのプランを簡単に説明する。

対話の開始や終了、および(円滑な)進行には一定の手順を踏む必要がある。この手順の履行をつかさどるプランを、ダイアログプランという。たとえば電話対話の開始の合図として、「もしもし」と言う時、発話者はダイアログプランに従った発話を実践しているといえる。

発話者が対話を行っていくには、相手の発話に応答することが必須だが、この応答は、以下に説明する2つのレベルの双方において、適正と認められたものでなければならない。2つのレベルとは、次のa) b)をいう。

a) 表層の文形式とは比較的近く、発話者の意図とは比較的遠いレベル

b) 表層の文形式とは比較的遠く、発話者の意図とは比較的近いレベル

a)のレベルにおける適正判断の基準となるプランをインターアクションプランといい、b)のレベルにおける適正判断の基準となるプランをコミュニケーションプランという。

また、対話を管理していくには、対話中での話題に関する何らかの言語外的な知識が、発話者に求められることがある。この知識に関するプランをドメインプランという。

1.3.2 情報伝達行為

[対話進展のプラン]を遂行する行為(発語媒介行為の一部)と、[相手との情報交換のプラン]を遂行する行為(発語内行為)とを併せて、情報伝達行為と呼ぶ(詳細は[有田・飯田1989]、[山岡・飯田1990]等を参照)。言い替えれば、発話の主目標が対話における主目標であることを念頭において考えれば、本研究で認める情報伝達行為には、ダイアログプランに関わるものと、コミュニケーションプランに関わるものがある。以下の例では、発話の果たす情報伝達行為を、後ろの()内に記すことがある。

1.3.3 発話クラスター

対話の中で、発話どうしが、果たしている情報伝達行為の上で結びつき、1つの大きなまとまりをなす時、そのまとまりを本研究では発話クラスターと呼ぶ。これはこれまで発話対・隣接対・対話対と呼ばれていたものを改称したものである。発話クラスターは対話構造の基本単位であって、談話セグメント [Grosz1986] の最小単位である。また、発話クラスターを構成する発話は、ただ1人の発話者によって話されたものであってはならない。

特にコミュニケーションプランの発話クラスターの場合、1つの発話クラスターが、3種以上の発話から構成される(つまり発話の果たす情報伝達行為が3種以上になる)ことも十分あるので、「対」を「クラスター」に改めた次第である。発話クラスターを構成する発話は、その発話が果たしている情報伝達行為の順序によって、第1部の発話・第2部の発話・…と呼ぶことにする。(具体例は以下に記載)

本研究では発話クラスターを、ダイアログプラン・コミュニケーションプランの2つのレベルで認めている。ダイアログプランのレベルでの発話クラスターは、「情報交換の基本単位」というと多少はずれる感があるが、「談話セグメントの最小単位」であることは確かだろう。下の例での下線部は、ダイアログプランのレベルでの発話対を構成している。

例 1.1	質問者： さようなら。	(GreetingClose)
		…… 第1部の発話
	事務局： 失礼いたします。	(GreetingClose)
		…… 第2部の発話

他方、下の例で下線を施した発話は、コミュニケーションプランのレベルでの発話クラスターを構成している。

例 1.2	事務局： ご職業をどうぞ。	(Ask-Value)
		…… 第1部の発話 = <i>Demand Class</i> の発話
	質問者： 大学教員です。	(Inform-Value)
		…… 第2部の発話 = <i>Response Class</i> の発話
	事務局： わかりました。	(Understand)
		…… 第3部の発話 = <i>Confirmation Class</i> の発話

なお、発話クラスターの各部は、1発話だけで成り立っているとは限らない。下の例では、発話クラスターの第3部が2発話で成り立っていることに注意されたい。

例 1.3	事務局： ご職業をどうぞ。	(Ask-Value)
		…… 第1部の発話
	質問者： 大学教員です。	(Inform-Value)
		…… 第2部の発話
	事務局： そうですか。わかりました。	(Understand)
		…… 第3部の発話

1.3.4 発話スタック・スタック発話

発話クラスターを構成する発話が、本来予想されるべき位置に現れない場合、一般に少なくとも次の3つが原因として考えられる。

1. 関与性違反
2. 発話スタック
3. 間接応答

最初に挙げた関与性違反は、たとえば「彼女は逮捕歴が有るんですか」という問い (Confirm-Value) に対して「今週はいい天気が続きますね」と応える場合がこれに該当する。この応答は、「彼女の逮捕歴の有無は、今触れるべき話題ではない」との判断表示と解釈される可能性も有り得るし、また単に質問を無視した無作法な発話と解釈される可能性も有り得るが、いずれの場合にせよ本研究では扱わない。

ここでは次に挙げた、発話スタックについて説明する。(間接応答については、下で説明する。)

発話は2発話、3発話(あるいはそれ以上の発話)ごとにまとまって、発話クラスターを構成する。1つの発話クラスターを構成する発話は互いに連続して生起するのが原則だが、そうでない場合もある。つまり、発話クラスターを構成する発話Aと発話Bの間に、別の発話クラスターに属する発話が介在する場合がある。このような場合、発話Aは、発話クラスターの最終部である発話Bが対話に現れるまでは、最終部待ちの状態が発話スタックに置かれている、と本研究では考える。発話スタックに置かれている発話を、スタック発話と呼ぶことにする。発話Bが現れた段階で発話AとBの発話クラスターが完成し、それまでスタック発話であった発話Aは発話スタック上から消える。

たとえば下の対話では、事務局の最後の発話が見れるまでは、質問者の最初の発話 (Confirm-Statement) は発話スタックに置かれている。事務局の最初の発話 (Confirm-Value) と質問者の2番目の発話 (InformNegative-Value) は、別の発話クラスターを構成している。

例 1.4	質問者： 会議に参加できますか。	(Confirm-Statement)
	事務局： おそれいますが会員の方ですか。	(Confirm-Value)
	質問者： いいえ。	(InformNegative-Value)
	事務局： でしたら参加はできません。	(InformNegative-Statement)

発話スタックに置かれる発話としては、発話クラスターの第1部をなす発話が多い。但し下の例のように、第1部と第2部が併せて発話スタックに置かれることも考えられる。

例 1.5	質問者： 会議は何日からですか。	(Ask-Value)	
		 第1部
	事務局： 24日からです。	(Inform-Value)	
		 第2部
	: ご出席なさいますか。	(Confirm-Statement)	
	質問者： いや多分できません。	(InformNegative-Statement)	
	: どうもありがとう。	(Thanks)	
	 第3部	
事務局： どういたしまして。	(Welcome)		
	 第4部	

複数の並列する対話を、単一の発話で同時に締めくくすることで、複数の発話クラスターを完成させる場合も、やはり第1部と第2部が一時、発話スタックに置かれることになる。

例 1.6	質問者： 会議は何日からですか。	(Ask-Value)	
		 第1部
	事務局： 24日からです。	(Inform-Value)	
		 第2部
	質問者： 有料ですか。	(Confirm-Value)	
		 第1部
	事務局： いいえ無料です。	(InformNegative-Value)	
	 第2部	
質問者： どうもありがとう。	(Thanks)		
	 第3部	
事務局： どういたしまして。	(Welcome)		
	 第4部	

1.3.5 間接応答

たとえば下の例1.7の対話は決して不自然なものではないが、この対話だけから何らかの発話クラスターを完成しようとすることは困難である。これは、例1.8のような対話から下線部のような発話のやりとりが省略されたものとして考えることができる。このように、いくつかの発話の並びの中で、存在するはずのやりとりの一部が、省略されたと考えられる場合、結果として表層に残存する対話のやりとりからだけでは正しい発話クラスターが完成できない場合がある。このような、結果として表層に残存する対話群を、本研究では間接応答と呼ぶことにする。

間接応答は前半の情報伝達行為を果たす発話と、後半の情報伝達行為を果たす発話に2分することができる。例1.7では、「用紙を送って下さい」が前者、「ご住所を仰って下さい」が後者である。

- | | | |
|-------|-----------------------|-------------------------|
| 例 1.7 | 質問者：用紙を送って下さい。 | (RequestPromise-Action) |
| | 事務局：ご住所を仰って下さい。 | (Ask-Value) |
| 例 1.8 | 質問者：用紙を送って下さい。 | (RequestPromise-Action) |
| | 事務局： <u>承知いたしました。</u> | (Promise-Action) |
| | 質問者： <u>ありがとう。</u> | (Thanks) |
| | 事務局：ご住所を仰って下さい。 | (Ask-Value) |

念のためにいうと、例 1.7 の対話が上の例 1.8 のように常に分析されるというわけではない。例 1.9 のように、「ご住所を仰って下さい」と発話する時点で、事務局が用紙送付を約束していない場合も十分ある。

- | | | |
|-------|-----------------------|-------------------------|
| 例 1.9 | 質問者：用紙を送って下さい。 | (RequestPromise-Action) |
| | 事務局：ご住所を仰って下さい。 | (Ask-Value) |
| | 質問者：アメリカの方なんですが。 | (Inform-Value) |
| | 事務局：それでは送りすることはできません。 | (RejectPromise-Action) |

しかし、だからといって間接応答という概念が本研究にとって不必要ということにはならない。「用紙を送って下さい」「ご住所を仰って下さい」という対話は、たしかに例 1.9 のような対話の一部として実現することがあるが、それだけではなく、例 1.8 から下線部が省略された間接応答として実現することも十分にあるからである。特に、「ご住所を仰って下さい」の前に「では」「それでは」「じゃあ」等が現れる場合は、間接応答の可能性が高い。この点で「では」「それでは」「じゃあ」等の語句の生起も、対話を理解する上で看過できない。

次の例 1.10 も同様で、やはり例 1.11 の下線部が省略された間接応答と考えることができる。

- | | | |
|--------|------------------------|------------------------|
| 例 1.10 | 質問者：用紙を送って下さい。 | (RequestPermit-Action) |
| | 事務局：あさってにはそちらにつくと思います。 | (Inform-Statement) |
| 例 1.11 | 質問者：用紙を送って下さい。 | (RequestPermit-Action) |
| | 事務局：わかりました。 | (Promise-Action) |
| | ：あさってにはそちらにつくと思います。 | (Inform-Statement) |

間接応答の認定には、言語外的知識の運用が必要であることが多い。例 1.7 の事務局の発話は、用紙の送付履行を約束してのものだが、この約束は形式で明示されたわけではなく暗黙の前提とされており、「用紙送付には送付先の住所を前もって知ることが必要」という言語外的知識を用いた推論によって導かれる。例 1.10 の場合であれば「用紙到着が問題になるのは用紙送付が履行された場合に限る」という言語外的知識が必要とされる。これらの知識は、具体的にはドメインプランの充実・整備という形で、我々の枠組に組み込まれることになる。

2 情報伝達行為と発話クラスターの紹介

この章では、分類された情報伝達行為と、それらを基盤においた発話クラスターのパターンを紹介する。

2.1 情報伝達行為の一覧

一覧の前に、情報伝達行為の分類に際しての本研究の立場を明らかにしておきたい。情報伝達行為の分類にあたっては、形式面・意味面の両面から、下の1) 2)の要請がある。

- 1) 形式面からの要請： 情報伝達行為の分類は、文形式の違いを反映していることが望ましい。つまり、文形式から割り出しやすいことが望まれる。
- 2) 意味面からの要請： 情報伝達行為の分類は、対話構造を反映していることが望ましい。つまり、アクション・ハイアラーキー構築に都合のよい土台となり得ることが望まれる。

そこで1) 2) 両要請の兼ね合いが問題になるわけだが、本研究では、情報伝達行為と言語形式との対応記述という第一目的にかんがみ、形式面からの要請1)を相対的に重視して分類を行う。

注目する文形式としては、やはり文末形式が中心となる。が、文末形式以外にも、本研究で注目する形式としては、たとえば以下のようなものがある。これらと文末形式に着目した、各情報伝達行為の特徴づけは3章を参照。

- a) 特定の語が生起するかどうか。
- b) 文が主題文かどうか。
- c) 文が疑似分裂文かどうか。
- d) 文が平叙文か疑問文か命令文か。
- e) 条件表現や時空限定表現が文に生起しているか。
- f) 主語の人称が1人称か2人称か3人称か。

前置きは以上で終わり、以下、本研究で分類された情報伝達行為を、ごく簡単な説明や代表例を付けて一覧形式で記す。情報伝達行為の分類にあたっては、表層形式と情報伝達行為との密接な対応づけをはかるといふ本研究の第一目的にかんがみ、(あくまで一試案として)従来よりも多少細かく分類しているところが有る。さらに、従来から設定されていた情報伝達行為についても、その名称や内容が変更されているものが有るので注意されたい。

情報伝達行為には、ダイアログプランに関わる情報伝達行為と、コミュニケーションプランに関わる情報伝達行為とが有る。後者の情報伝達行為は更に、*Demand Class*に属するもの、*Response Class*に属するもの、*Confirmation Class*に属するものに三分できる。

特に *Demand Class* と *Response Class* に属する情報伝達行為は、[行為タイプ] と [話題の属性] とから成る。それらはハイフンで結び付けて表してある。ハイフンの左側が [行為タイプ]、右側が [話題の属性] を表す。[話題の属性] としては Value/Statement/Action の3つの可能性が有る。但し、いくつかの情報伝達行為においては、[話題の属性] は Action に定まっており、Value や Statement の可能性はない。(以下の表の情報伝達行為記述中(1カラム目)の -* は、-Value/Statement/Action すべての可能性があることを表している。)

ダイアログプランに関わる情報伝達行為

A-1	GreetingOpen	:	対話の開始(や再開)を要求する。
		-	「もしもし。」
A-2	GreetingClose	:	対話の終了を通告する。
		-	「ではまた。」
A-3	Aiduchi	:	その時点までの相手の発話を自分が了解したことを示し、相手にさらなる発話を促し、対話の円滑な進行をはかる。例外的に、コミュニケーションプランに関わる情報伝達行為である Inform と発話クラスターを構成する。
		-	「はい。」

コミュニケーションプランに関わる情報伝達行為

1. *Demand Class* に属するもの

Request 系列

A-4	RequestPromise-Action	:	動作を履行するとの約束を要求する。
		-	「用紙を送って下さい。」
A-5	RequestPromiseNot-Action	:	動作不履行の約束を要求する。
		-	「宿泊先は国際ホテルにしないで下さい。」
A-6	RequestPermit-Action	:	動作履行の許可付与宣言を要求する。
		-	「欠席してもいいでしょう。」

Confirm/Ask 系列

A-7	Confirm-*	:	命題の真偽を問う。
		-	「それは有料ですか。」
A-8	Ask-*	:	値を問う。
		-	「値段はいくらですか。」

Suggest/Offer 系列

A-9	Suggest-Action	:	動作履行を提案する。
		-	「参加されたらどうですか。」
A-10	Offer-Action	:	動作履行を申し出る。
		-	「用紙を送らせていただきます。」

 コミュニケーションプランに関わる情報伝達行為 (続き)

2. *Response Class* に属するもの

- | | | | |
|------|----------------------|---|----------------------------|
| A-11 | Promise-Action | : | 相手の要求に応じて動作の履行 / 不履行を約束する。 |
| | | - | 「了解しました。」 |
| A-12 | RejectPromise-Action | : | 動作履行 / 不履行を約束せよとの相手の要求を拒む。 |
| | | - | 「それはできません。」 |
| A-13 | Permit-Action | : | 動作履行許可を付与する。 |
| | | - | 「欠席してもいいです。」 |
| A-14 | RejectPermit-Action | : | 履行許可の付与要求を拒む。 |
| | | - | 「駄目です。」 |
| A-15 | InformAffirmative-* | : | 命題が真だと答える。 |
| | | - | 「はい。」 |
| A-16 | InformNegative-* | : | 命題が偽だと答える。 |
| | | - | 「いいえ。」 |
| A-17 | Inform-* | : | 情報を提供する。 |
| | | - | 「1万円です。」 |
| A-18 | Accept-Action | : | 提案された動作履行を受諾する。 |
| | | - | 「そうします。」 |
| A-19 | Reject-Action | : | 提案された動作履行を拒否する。 |
| | | - | 「それは困ります。」 |
| A-20 | Refuse-Action | : | 申し出られた動作履行を拒絶する。 |
| | | - | 「それには及びません。」 |

3. *Confirmation Class* に属するもの

- | | | | |
|------|------------|---|------------------|
| A-21 | Understand | : | 相手の発話を理解したことを示す。 |
| | | - | 「そうですか。」 |
| A-22 | Yoroshiku | : | 念押し・感謝の意を表明する。 |
| | | - | 「よろしくお願いします。」 |
| A-23 | Zannen | : | 遺憾の意を表明する。 |
| | | - | 「それは残念です。」 |
| A-24 | Thanks | : | 感謝の意を表明する。 |
| | | - | 「どうもありがとう。」 |
| A-25 | Welcome | : | 好意を表明する。 |
| | | - | 「どういたしまして。」 |
-

2.2 発話クラスターのパターン一覧

ここでは、2.1節に記した情報伝達行為を果たす発話が、どのような発話クラスターを構成するのかを明らかにする。以下では発話クラスターは、何行かにわたる一つづきの情報伝達行為群によって表されている。それぞれの情報伝達行為は、この節では、それを果たす発話を表しているものとする。改行は、発話の話し手が変わることを表す。改行せずに、1行に複数個の情報伝達行為が記されている場合は、それらの情報伝達行為を果たす発話は全て同一の発話者が発話するものとする。()は、その情報伝達行為を果たす発話が常に生起するとは限らないことを表す。さらに「&」が用いてある箇所では、「&」で結ばれている発話どうしの先後関係が、表記された順序のみに限られないとする。以下、簡単な例をつけて示す。

ダイアログプランに関わる発話の発話クラスター

C-1	GreetingOpen (GreetingOpen)	質問者： もしもし。 事務局： もしもし。
C-2	GreetingClose (GreetingClose)	質問者： ではまた。 事務局： さようなら。

コミュニケーションプランに関わる発話の発話クラスター コミュニケーションプランに関わる発話の発話クラスターは、基本的には [Demand Class の発話] [Response Class の発話] [Confirmation Class の発話] がこの順で生起することによって構成される。但し [Confirmation Class の発話] は生起しないこともある。

また C-18 のように、 [Response Class の発話] が現れず、 [Demand Class の発話] [Confirmation Class の発話] がこの順で生起することによって構成されることもあるし、 C-20, C-21 のように、 [Confirmation Class の発話] の連続だけによって構成されることもある。さらに C-22 のように、 [Demand Class の発話] が現れず、 [Response Class の発話] [Confirmation Class の発話] がこの順で生起することによって構成されることもある。

これらの発話は必ずしも連続して (つまり他の発話をはさまずに) 生起するとは限らない。(対して、上に記したダイアログプランの発話クラスターの場合、これを構成する発話は必ず連続して生起するため発話スタックとは無縁である。)

以下、簡単な例を付けて記す。

(例の情報伝達行為記述中 (1 カラム目) の -* は、 -Value/Statement/Action を表している。)

C-3	RequestPromise-Action Promise-Action (Thanks (Welcome))	質問者： 用紙を送って下さい。 事務局： 承知しました。 質問者： ありがとう。 事務局： どういたしまして。
-----	--	--

C-4	RequestPromise-Action Promise-Action (Understand)&(Yoroshiku)	質問者：用紙を送って下さい。 事務局：承知いたしました 質問者：そうですか。よろしくお願いします。
C-5	RequestPromise-Action RejectPromise-Action (Understand) (Zannen)	質問者：用紙を送って下さい。 事務局：それはできません。 質問者：そうですか。それは残念です。
C-6	RequestPromiseNot-Action Promise-Action (Thanks (Welcome))	質問者：宿泊先は国際ホテルにしないで下さい。 事務局：承知致しました。 質問者：ありがとう。 事務局：どういたしまして。
C-7	RequestPromiseNot-Action Promise-Action (Understand)&(Yoroshiku)	質問者：宿泊先は国際ホテルにしないで下さい。 事務局：承知致しました。 質問者：そうですか。よろしくお願いします。
C-8	RequestPromiseNot-Action RejectPromise-Action (Understand) (Zannen)	質問者：宿泊先は国際ホテルにしないで下さい。 事務局：申し訳ございませんがご要望にはお応えできません。 質問者：そうですか。それは残念です。
C-9	RequestPermit-Action Permit-Action (Thanks (Welcome))	質問者：代理人を立ててもいいでしょう。 事務局：構いません。 質問者：ありがとう。 事務局：いいえ。
C-10	RequestPermit-Action Permit-Action (Understand)	質問者：欠席してもいいでしょう。 事務局：まあ構いません。 質問者：そうですか。
C-11	RequestPermit-Action RejectPermit-Action (Understand)	質問者：欠席してもいいでしょう。 事務局：駄目です。 質問者：そうですか。
C-12	RequestPermit-Action RejectPermit-Action (Zannen)	質問者：欠席してもいいでしょう。 事務局：駄目です。 質問者：それは残念です。

C-13	Confirm- InformAffirmative- (Understand) (Thanks (Welcome))	質問者：参加は無料ですか。 事務局：はい無料です。 質問者：そうですか。どうもありがとう。 事務局：いいえ。
C-14	Confirm- InformNegative- (Understand) (Thanks (Welcome))	質問者：参加は有料ですか。 事務局：いいえ無料です。 質問者：そうですか。どうもありがとう。 事務局：いいえ。
C-15	Ask- Inform- (Understand) (Thanks (Welcome))	質問者：費用はいくらですか。 事務局：3万円です。 質問者：そうですか。どうもありがとう。 事務局：どういたしまして。
C-16	Suggest-Action Accept-Action (Thanks (Welcome))	事務局：参加されたいかがですか。 質問者：そうしてみます。どうもありがとう。 事務局：どういたしまして。
C-17	Suggest-Action Reject-Action (Thanks (Welcome))	事務局：参加されたいかがですか。 質問者：いえ結構です。わざわざどうもありがとう。 事務局：どういたしまして。
C-18	Offer-Action (Understand)& (Yoroshiku)&(Thanks (Welcome))	事務局：さっそく用紙を送らせていただきます。 質問者：そうですか。 ：お願いします。どうもありがとう。 事務局：どういたしまして。
C-19	Offer-Action Refuse-Action&(Thanks (Welcome)) Understand	事務局：さっそく用紙を送らせていただきます。 質問者：いやそれには及びません。どうも有難う。 事務局：いえいえ。わかりました。
C-20	Thanks Welcome	質問者：どうもありがとう。 事務局：いいえどういたしまして。
C-21	Yoroshiku ((Understand) Yoroshiku)	質問者：では当日よろしくお願いします。 事務局：はい。こちらこそよろしくお願ひいたします。 ²

²後者の Yoroshiku 発話においては、「こちらこそ」の生起が必要。

C-22	Inform-*	(Understand)	事務局：お名前をお聞かせ下さい。
			質問者： <u>あの私、今は違うんですが、会議当日には、</u>
			： <u>結婚して姓が変わってるはずなんです。</u>
			事務局： <u>そうですか。</u>
			質問者：どちらの姓を言えばよろしいでしょう。
			事務局：現在の姓で結構です。
			質問者：田中礼子です。
事務局：わかりました。			

ダイアログプランとコミュニケーションプランに関わる発話の発話クラスター ダイアログプランに関わる発話と、コミュニケーションプランに関わる発話とが発話クラスターを構成することが、まれには有る。これが下の23の場合である。詳しくは3節を参照。(例は下の対話の下線部。説明は後述する。)

C-23	Inform-*	(Aiduchi)	事務局：お名前をお聞かせ下さい。
			質問者： <u>あの私、今度結婚するんです。</u>
			事務局： <u>はい。</u>
			質問者：旧姓と新姓のどちらを言えばよろしいでしょう。
			事務局：現在の姓で結構です。
			質問者：田中礼子です。
			事務局：わかりました。

2.3 スタック発話のパターン一覧

発話は、古いものから順に発話スタックに積み上げられるので、発話スタックでは上に有るスタック発話ほど新しいスタック発話ということになる。ここでは、どのような発話が発話スタックに置かれ得るか、どのような発話が直前の相手の発話を発話スタックに置き得るのかを記す。

発話スタックに置かれ得る発話は原則として、コミュニケーションプランに関わる情報伝達行為、中でも *Demand Class* の情報伝達行為(下の S-1-7)を果たす発話に限られる。ダイアログプランに関わる情報伝達行為を果たす下の例のような場合も考えられるが、これは例外としておく。

例 2.1

質問者： おはようございます。 先日の田中太郎です。
 事務局： ええと、田中太郎様、でいらっしゃいますか？
 質問者： はい、田中です。登録用紙のことで先日お電話した。
 事務局： ああ、あの田中様ですか。 おはようございます。

S-1 RequestPromise-Action

S-2 RequestPromiseNot-Action

S-3 RequestPermit-Action

S-4 Confirm-Value/Statement/Action

S-5 Ask-Value/Statement/Action

S-6 Suggest-Action

S-7 Offer-Action

それぞれ例を以下に記す。

(例の情報伝達行為記述中(3カラム目)の-*は、-Value/Statement/Actionを表している。)

S-1	質問者： 用紙を送って下さい。 事務局： 有料ですけど構いませんか。	(RequestPromise-Action) (Confirm-Statement)
S-2	質問者： 宿泊先は国際ホテルにはしないで下さい。 事務局： 23日の宿泊先ですか。	(RequestPromiseNot-Action) (Confirm-Value)
S-3	質問者： 代理人を立ててもいいでしょう。 事務局： その方も会員の方ですか。	(RequestPermit-Action) (Confirm-Value)
S-4	質問者： 両日の参加は可能なのですか。 事務局： 会員の方ですか。	(Confirm-Statement) (Confirm-Value)
S-5	質問者： 会場まではどう行ったらいいですか。 事務局： そこはどこですか。	(Ask-Action) (Ask-Value)
S-6	事務局： 観光ツアーもいらっしゃったらいかがですか。 質問者： 時間は何時間ぐらいかかるんですか。	(Suggest-Action) (Ask-Value)
S-7	事務局： パンフレットをさっそくお送りさせて頂きま す。 質問者： それは宿泊先についてのパンフレットですか。	(Offer-Action) (Confirm-Value)

ある発話を発話スタックに置くには、その発話と同じ発話クラスターに属さない別の発話が直後に生起することが必要である。この別の発話は、原則的には、Confirm 発話か Ask 発話でなければならない。(尤も、Inform 発話である可能性もないわけではない。本節直前で挙げた、Inform 発話と Aiduchi 発話の発話クラスターの例 C-23 を参照。) 上の各例において、1つ目の発話を発話クラスターに置く2つ目の発話は、全て Confirm 発話か Ask 発話である。

2.4 間接応答のパターン一覧

間接応答は、通常の対話から、1続きの発話が省略されてできる。しかし、どのような発話でも省略できるというわけではない。この節では、省略される1続きの発話の可能性を列挙することにより、有り得る間接応答を制限することを試みる。

省略される1続きの発話、及びそれらの直前・直後の発話は全て、コミュニケーションプランに関わる情報伝達行為を果たす。ダイアログプランに関わる情報伝達行為を果たす発話は、間接応答とは無縁である。

省略される1続きの発話の直前に位置する発話は、*Demand Class* の情報伝達行為を果たすものに限られる。そしてこの発話と発話クラスターを構成する他の発話が全て省略される。

省略される1続きの発話の直後に位置する発話も、やはり *Demand Class* の情報伝達行為の一部 (RequestPermit-Action, Confirm-Value/Statement/Action, Ask-Value/Statement/Action) か、あるいは Inform を果たす。さらにその発話は、省略されている発話がドメインプラン上で実現したステップを前提としている。

以下にパターンを挙げ、それぞれ例を示す。

(例の情報伝達行為記述中(1カラム目)の-*は、-Value/Statement/Actionを表している。)たとえば1では、RequestPromise-Action, Promise-Action, Thanks, Welcomeなどのコミュニケーションプランに関わる情報伝達行為を果たす発話群が発話クラスターを構成している。これは2.2節で紹介したとおりである。そしてこの発話クラスターのうち、第1部にあたる *Demand Class* の RequestPromise-Action の発話「用紙を送って下さい」を除き、他の発話は全て省略される。(発話される文章をゴシック体, 省略されるものを明朝体で表す。)代わって対話中には、やはり *Demand Class* の情報伝達行為である RequestPromise-Action の発話が現れている。この発話が冒頭の RequestPromise-Action 発話とで間接応答を構成する。

I-1	RequestPromise-Action	質問者：用紙を送って下さい。
	Promise-Action	事務局：承知しました。
	(Thanks	質問者：ありがとう。
	(Welcome))	事務局：どういたしまして。
	Confirm-*	：送付先は事務所の方ですか。(Confirm-Action)

I-2	RequestPromise-Action Promise-Action (Thanks (Welcome)) Ask-*	質問者：用紙を送って下さい。 事務局：承知しました。 質問者：ありがとう。 事務局：どういたしまして。 ：ご住所をお願いします。(Ask-Value)
I-3	RequestPromise-Action Promise-Action (Thanks (Welcome)) Inform-*	質問者：用紙を送って下さい。 事務局：承知しました。 質問者：ありがとう。 事務局：どういたしまして。 ：明日着くと思います。(Inform-Statement)
I-4	RequestPromise-Action Promise-Action (Understand)&(Yoroshiku) RequestPermit-Action	質問者：用紙を送って下さい。 事務局：では今日中に送らせて頂きます。 質問者：わかりました。よろしくお願いします。 事務局：普通郵便でもいいでしょう。
I-5	RequestPromise-Action Promise-Action (Understand)&(Yoroshiku) Confirm-*	質問者：用紙を送って下さい。 事務局：では今日中に送らせて頂きます。 質問者：わかりました。よろしくお願いします。 事務局：送付先は事務所の方ですね。(Confirm-Action)
I-6	RequestPromise-Action Promise-Action (Understand)&(Yoroshiku) Ask-*	質問者：用紙を送って下さい。 事務局：では今日中に送らせて頂きます。 質問者：わかりました。よろしくお願いします。 事務局：ご住所をお願いします。(Ask-Value)
I-7	RequestPromise-Action Promise-Action (Understand)&(Yoroshiku) Inform-*	質問者：用紙を送って下さい。 事務局：では今日中に送らせて頂きます。 質問者：わかりました。よろしくお願いします。 事務局：明日着くと思います。(Inform-Statement)
I-8	Offer-Action (Understand)&(Thanks (Welcome)) Confirm-*	事務局：他に何かご不明の点がございましたら、何なりと仰って下さい。 質問者：わかりました。有り難う。 事務局：どういたしまして。 質問者：参加は有料ですか。(Confirm-Statement)

I-9	Offer-Action	事務局：他に何かご不明の点がございましたら、何なりと仰って下さい。
	(Understand)&(Thanks	質問者：わかりました。有り難う。
	(Welcome))	事務局：どういたしまして。
	Ask-*	質問者：参加費はどれぐらいですか。(Ask-Value)

I-8,9 については、省略直前の発話形式が、例に挙げたようなもの以外にはほとんど無い。「ご用件/質問をうけたまわります」「他に何かご不明の点はございますか」「他にどのような点がご不明でしょうか」等が有るぐらいである。この点で、I-8,9 は他の間接応答とはやや性質の異なるものと言えるが、本研究では特に区別を設けず、一括して間接応答とする。

間接応答のパターンを以上 I-1~9 のように列挙しておくことで、たとえば下の例のような対話が間接応答をなすものでないことがわかる。

例 2.2	質問者：参加はまだ可能なのですか。	(Confirm-Statement)
	事務局：会員の方ですか。	(Confirm-Value)

つまり、事務局は「会員の方ですか」と尋ねることで「参加が可能だ」との表明を行っているわけではなく、参加の可否は質問者が会員かどうか次第だと考えていることが、以上の間接応答パターン列挙によって明らかになる。

3 情報伝達行為の分類

本章では、2.1節で紹介した情報伝達行為に対し、必要に応じて他の情報伝達行為との類似点や相違点をも適宜含め、明らかにする。

3.1 ダイアログプランに関わる情報伝達行為

ダイアログプランとは、既に1章で述べたとおり、対話の開始や終了、あるいは(円滑な)進行のための、慣用的色彩の濃い一定の手順の履行をつかさどるためのプランを指す。A-1のGreetingOpenやA-2のGreetingCloseは、前者の意味でダイアログプランに関わるといえるし、A-3のAiduchiは後者の意味でダイアログプランに関わると言える。

A-3のAiduchiの「はい」について、簡単に説明しておく。

例 3.1	事務局：お名前をおっしゃって下さい。	(Ask-Value)
	質問者：あの、私、今はまだ独身なんです、学会 当日までには結婚しているはずなんです。	(Inform-Statement)
	事務局： <u>はい。</u>	(Aiduchi)
	質問者：旧姓と新姓と、どちらをいえばよろしいで しょう。	(Ask-Action)
	事務局：旧姓でけっこうです。	(Inform-Action)
	質問者：そうですか。田中明子です。	(Confirmation, Inform-Value)
	事務局：わかりました。	(Confirmation)
例 3.2	事務局：お名前をお聞かせ下さい。	(Ask-Value)
	質問者：あの私、アメリカ人なんです。	(Inform-Value)
	事務局： <u>はい。</u>	(Aiduchi)
	質問者：姓と名前のどちらから言えばよろしいでしょ う。	(Ask-Value)
	事務局：名前からで結構です。	(Inform-Value)
	質問者：レイコ・タナカです。	(Inform-Value)
	事務局：わかりました。	(Understand)

*Inform*の発話は、発話クラスターの第2部になることはあっても、第1部にはならないのが普通であるが、まったくならないわけではない。上の例3.1でも、「あの、私、今はまだ独身なんです、学会当日までには結婚しているはずなんです」とのInform-Statement発話は、発話クラスターの第1部に当たる。

第1部になる場合の*Inform*発話には、真の発話クラスター第1部(上の例で言えば、「旧姓と新姓のどちらを言えばよいのかとのAsk-Action発話)が後続する。つまり*Inform*発話は、

真の第1部の前置きとしての機能を果たすわけである。問題の Aiduchi 発話は、このような *Inform* 発話と、後続する真の第1部との間に位置する。

名前を言えと要求したのに相手が急に、自分の結婚のことを *Inform* し始めた。この *Inform* 発話が、その時点までの発話と発話クラスターを構成するとは思えない。とすれば、その *Inform* 発話は、何らかの *Demand* 発話の前置きにちがいない。ここは相手の発話を促して、肝心の *Demand* 発話を聞こう - Aiduchi を発する話し手の動機を、仮に以上のように考えると、Aiduchi がダイアログプランに関わることも自然に理解される。

そしてまた、目標指向型の対話では、このような *Demand* 発話の前置きとしての *Inform* 発話が、スタックに置かれにくいという制約も当然であろう。相手の発話を促して *Demand* 発話を聞かねばならないはずの箇所で、相手の発話を阻害することは不自然である。従って、このような *Inform* 発話は、発話スタックに置かれることなく、すぐさま Aiduchi 発話によって受けとめられ、両発話は発話クラスターを構成することになる。

ただ、Aiduchi 発話を発しさえすれば、相手が手際よく *Inform* を終了し、すぐさま肝心の *Demand* 発話を発してくれるかどうかはわからない。まどろっこしい相手の場合、*Demand* 発話を出すまでに、何度も *Inform* 発話の前置きがあり、こちらはそれをいちいち Aiduchi 発話で受けなければならないといったこともおこりえる。

また実際の口頭対話などでは、相手の文節の切れ目ごとに「はい」が入り得るが、これも基本的にはこの Aiduchi の機能を果たしていると見てよい。

ダイアログプランが対話の進行・開始・終了を扱うというその本質的性格からして、ダイアログプランに関わる情報伝達行為は(対話の開始・終了における情報伝達行為はともかく)対話中どこにおいても、必要さえあれば、前後の文脈と関係なく出現できる。たとえば「もしもし」は、対話の冒頭だけではなく、話し手が正常な対話の運行に不安を感じれば、基本的にいつでも、発することができる。(すぐ下で述べる)

3.1.1 GreetingOpen

対話の開始を要求する GreetingOpen は、「もしもし」の他にも「おはようございます」「はい」等が有る。GreetingOpen を果たす発話文に後接するのは、句点(。)だけでなく読点(、)が後接することもある。GreetingOpen の「はい」は、対話の申込み手(つまり電話をかける者 = 質問者)ではなく対話の応じ手(つまり電話をかけられる者 = 事務局)しか発することができない。

対話の再開を要求するとは、たとえば混線により対話が中断した場合を想定している。(事実、そのような例が「国際会議の参加に関する問い合わせ対話」中にも有った)。また、混線以外にも、次の例のように、相手を待たせた場合にも GreetingOpen の発話を用いることができる。

- 例 3.3
- 質問者： 会議場へのバスは何時に出るでしょうか。
 事務局： 少々お待ち下さい。……
 : お待たせ致しました。もしもし。
 質問者： はい。
 事務局： 9時30分にホテル出発でございます。

但し、その場合には「おはようございます」「こんにちは」「はい」等は不適當であり、「もしもし」「お待たせしました」等のみが用いられることになる。

3.1.2 GreetingClose

「国際会議の参加に関する問い合わせ対話」では、質問者のみが発する(つまり一方的に対話を打ち切る)ことは有っても、事務局のみが発するということは無い。また、質問者と事務局の双方が GreetingClose 発話を発する場合も有るが、その場合、必ず質問者が事務局よりも先に発する。対話の開始・終了に関しては、質問者がイニシアチブを握っているといえることができる。

3.1.3 Aiduchi

例外的に、コミュニケーションプランに関わる情報伝達行為である Inform と発話クラスターを構成する。例を再掲する。

- 例 3.4
- | | |
|-----------------------------|--------------------|
| 事務局： お名前をお聞かせ下さい。 | (Ask-Value) |
| 質問者： <u>あの私、今度結婚するんです。</u> | (Inform-Statement) |
| 事務局： <u>はい。</u> | (Aiduchi) |
| 質問者： 旧姓と新姓のどちらを言えばよろしいでしょう。 | (Ask-Value) |
| 事務局： 現在の姓で結構です。 | (Inform-Value) |
| 質問者： 田中礼子です。 | (Inform-Value) |
| 事務局： わかりました。 | (Understand) |

相手から要請されたわけでもないのに、発話者が自発的に情報を提供しだすことが有る。たとえば上の対話で下線部を施した質問者の発話は、事務局の要請に基づくものではない。もちろん、「名前を言え」という事務局からの要請に対して質問者がよりよい形で応えようとして、「どちらの姓を言えばよいのか」を問うことは不自然ではないし、その質問を対話に持ち出す際に導入として、自分が近い将来結婚して姓が変わることを告げることも自然である。そしてこのような質問者の対話組立の意図は、最終的には事務局にも理解される。しかし、質問者が自分の結婚予定を Inform した時、事務局がこのような意図を理解しているとは考えにくい。このように、ある発話者 A からの要請に少なくとも直接応えるものではない、言わばひとり走り

した *Inform* 発話を他方の発話者 B が発する時、発話者 A がこれを受けるには、相手の発話意図は現時点で不明だがとりあえずどんどん喋らせて対話を進行させようという、ダイアログプランに関わる情報伝達行為 *Aiduchi* が最適と言える。

3.2 コミュニケーションプランに関わる情報伝達行為

3.2.1 Demand Class

3.2.1.1 文末形式以外の特徴的文形式

まず、

1. [必須格名詞句を主題にできるか]
2. [必須格名詞句を対比できるか]
3. [主語を中立叙述の「が」で受けることができるか]
4. [主語を総記の「が」で受けることができるか]
5. [文末に「ノダ」が生起できるか]
6. [文頭に「では」が生起できるか]

といった現象に関して、

- [文が果たす情報伝達行為が RequestPromise-Action か RequestPromiseNot-Action か Ask-Value/Statement/Action か]
- [文が当該情報伝達行為を直接的に果たすか、間接的に果たすか]

が有意であることを観察する。³

³ここでいう「直接的」「間接的」とは、それぞれ次のような事情を表す。或る文がどのような情報伝達行為を果たすのかについては、7章に挙げるような形式的な特徴を挙げるができる。たとえば或る文について、形式的な特徴 a に注目すればその文は情報伝達行為 A を果たすと考えられ、形式的な特徴 b に注目すればその文は情報伝達行為 B を果たすと考えられる、とする。さらに、形式的な特徴 a と b の間に包含関係 (仮に $a \supset b$ とする) が認められるとすれば、その文は直接的には情報伝達行為 B を、間接的には情報伝達行為 A を果たすといえることができる。

例を挙げる。

1. 「用紙を送って頂けませんか。」
2. 「住所を教えてください。」

1 の文は文末の「か」に注目すれば Confirm-Statement を果たすと考えられ、「て頂けませんか」に注目すれば RequestPromise-Action を果たすと考えられる。「て頂けませんか」は「か」を含むから、1 の文は直接的に Confirm-

3.2.1.1.1 【必須格名詞句を主題にできるか】

Ask-Value/Statement/Action を直接的に果たす文は必須格名詞句を主題にできる(というより、むしろ主題にしなければならない)。対して、Ask-Value/Statement/Action を間接的に果たす文は必須名詞句を主題にできない。さらに RequestPromise-Action を果たす文は、直接的・間接的を問わずできない。また、RequestPromiseNot-Action を果たす文は、直接的・間接的を問わずできる。

1.	ご住所はどちらですか。	(Ask-Value を直接的に果たす文)
2. ??	ご住所がどちらですか。	(Ask-Value を直接的に果たす文)
3.	ご住所を仰っていただけますか。	(Ask-Value を間接的に果たす文)
4.	ご住所は仰っていただけますか。	(Ask-Value を間接的に果たせず、 Confirm-Statement を果たすのみ)
5.	用紙を送って下さい。	(RequestPromise-Action を直接的に 果たす文)
6. ??	用紙は送って下さい。	(RequestPromise-Action を直接的に 果たす文)
	(但し、後述の対比の場合を除いた適格性判断となっている)	
7	用紙を送って頂けますか。	(RequestPromise-Action を間接的に 果たす文)
8. ??	用紙は送って頂けますか。	(RequestPromise-Action を間接的に 果たす文)
	(但し、後述の対比の場合を除いた適格性判断となっている)	
9.	午後の会議に遅れないで下さい。	(RequestPromiseNot-Action を直接 的に果たす文)
10.	午後の会議は遅れないで下さい。	(RequestPromiseNot-Action を直接 的に果たす文)
11.	午後の会議に遅れないで貰えますか。	(RequestPromiseNot-Action を間接 的に果たす文)
12.	午後の会議は遅れないで貰えますか。	(RequestPromiseNot-Action を間接 的に果たす文)

Statement を、間接的に RequestPromise-Action を果たすということになる。2も同様で、「て下さい」に注目すれば RequestPromise-Action を、「住所を教えてください」に注目すれば Ask-Value を果たすと考えられ、後者は前者を含むから、2の文は直接的に RequestPromise-Action を、間接的に Ask-Value を果たすということが出来る。

文が間接的に果たす情報伝達行為は、直接的に果たす情報伝達行為から2次的に派生されると考えれば、「直接的」「間接的」という言葉は、それぞれ“primary”, “secondary”と置き換えてもさしつかえない。但し、従来の研究の中には、これとちょうど反対の意味で“primary”, “secondary”という言葉を用いているもの(たとえば [Searle1975]:62)があり、混同を避けるためこれらの言葉は本研究では用いていない。

3.2.1.1.2 【必須格名詞句を対比できるか】

Ask を直接的に果たす文は必須格名詞句を対比できる。対して、Ask を間接的に果たす文はできない。さらに RequestPromise-Action を果たす文は、直接的・間接的を問わずできる。また、RequestPromiseNot-Action を果たす文も、直接的・間接的を問わずできる。

例	1. お勤め先は東京で、ご住所はどちらですか。	(Ask-Value を直接的に果たす文)
	2. お電話はないということですね。 ご住所は仰っていただけますか。	(Ask を果たせず、 Confirm-Statement を果たすのみ)
	3. 資料は要りませんが用紙は送って下さい。	(RequestPromise-Action を直接的に 果たす文)
	4. 資料は要りませんが用紙は送って頂けませんか。	(RequestPromise-Action を間接的に 果たす文)
	5. 午前の会議は遅れてもいいですが、 午後の会議は遅れないで下さい。	(RequestPromiseNot-Action を直接 的に果たす文)
	6. 午前の会議は遅れてもいいですが、 午後の会議は遅れないで貰えますか。	(RequestPromiseNot-Action を間接 的に果たす文)

3.2.1.1.3 【主語を中立叙述の「が」で受けることができるか】

Ask を直接的に果たす文は、(聞き返しでない限り) 主語を中立叙述の「が」で受けることができない。Ask を間接的に果たす文もやはりできない。さらに、RequestPromise-Action を果たす文も、直接的・間接的を問わずできない。また、RequestPromiseNot-Action を果たす文も、直接的・間接的を問わずできない。

例	1. ??	ご住所がどちらですか。	(Ask-Value を直接的に果たす文)
	2. ??	あなたのご住所を仰っていただけますか。	(Ask-Value を間接的に果たす文) (「が」を総記でなく中立叙述としての適格性判断)
	3. ??	あなたが用紙を送って下さい。	(RequestPromise-Action を直接的に果たす文) (「が」を総記でなく中立叙述としての適格性判断)
	4. ??	あなたが用紙を送って頂けませんか。	(RequestPromise-Action を間接的に果たす文) (「が」を総記でなく中立叙述としての適格性判断)
	5. ??	あなたが午後の会議に遅れないで下さい。	(RequestPromiseNot-Action を間接的に果たす文) (「が」を総記でなく中立叙述としての適格性判断)
	6. ??	あなたが午後の会議に遅れないで貰えますか。	(RequestPromiseNot-Action を間接的に果たす文) (「が」を総記でなく中立叙述としての適格性判断)

3.2.1.1.4 [主語を総記の「が」で受けることができるか]

Ask を果たす文は、直接的・間接的を問わず、主語を総記の「が」で受けることができない。対して Ask を間接的に果たす文はできる。さらに RequestPromise-Action を果たす文も、直接的・間接的を問わずできる。しかし、RequestPromiseNot-Action を果たす文は、直接的・間接的を問わずできない。

例	1. ??	ご住所がどちらですか。	(Ask-Value を直接的に果たす文)
	2.	他の人でなく、あなたのご住所を仰っていただけますか。	(Ask-Value を果たせず、Confirm-Statement か RequestPromise-Action を果たすのみ)
	3.	他の人ではなく、あなたが用紙を送って下さい。	(RequestPromise-Action を直接的に果たす文)
	4.	他の人ではなく、あなたが用紙を送って頂けませんか。	(RequestPromise-Action を間接的に果たす文)
	5. ??	他の人ではなく、あなたが午後の会議に遅れないで下さい。	(RequestPromiseNot-Action を間接的に果たす文)
	6. ??	他の人ではなく、あなたが午後の会議に遅れないで貰えますか。	(RequestPromiseNot-Action を間接的に果たす文)

3.2.1.1.5 [文末に「ノダ」が生起できるか]

ここで言う「ノダ」とは、実質的には「のですか」に等しい。まず、Ask にせよ RequestPromise-Action にせよ、RequestPromiseNot-Action にせよ、直接的に果たす文に問題の「ノダ」が生起

できないことは明白である。(例文は省略。)

更に間接的に果たす文にも、「ノダ」は生起できない。「ノダ」が生起すれば、Ask-Value/-Statement/Action・RequestPromise-Action・RequestPromiseNot-Action を果たす可能性は全て消え、Confirm-Statement の可能性だけが残る。(「用紙を送るのです！」等は命令として用いられ得るが、本稿では扱っていない。)

例	2. ご住所を仰っていただけるのですか。	(Ask-Value を果たせず、Confirm-Statement を果たすのみ)
	4. あなたが用紙を送って頂けるのですか。	(RequestPromise-Action を果たせず、Confirm-Statement を果たすのみ)
	6. 午後の会議に遅れないで貰えるのですか。	(RequestPromiseNot-Action を果たせず、Confirm-Statement を表すのみ)

3.2.1.1.6 【文頭に「では」が生起できるか】

ほとんどの場合「では」の生起は自然だが、RequestPromiseNot-Action を間接的に果たす文のみ、「では」が生起できない。従って「では」が生起すると Confirm-Value/Statement/Action を果たす文になる。

例	1. では、ご住所はどちらですか。	(Ask-Value を直接的に果たす文)
	2. では、ご住所を仰っていただけますか。	(Ask-Value を間接的に果たす文)
	3. では用紙を送って下さい。	(RequestPromise-Action を直接的に果たす文)
	4. では用紙を送って頂けませんか。	(RequestPromise-Action を間接的に果たす文)
	5. では午後の会議に遅れないで下さい。	(RequestPromiseNot-Action を間接的に果たす文)
	6. では午後の会議に遅れないで貰えますか。	(RequestPromiseNot-Action を間接的に果たせず、Confirm-Value/-Statement/-Action を果たすのみ)

なお仁田(1991:27)には

「働きかけの文は、題目を共起させない。[中略] <働きかけ>である命令・依頼・禁止が、「ハ」「ガ」で題目や中立的な叙述を表しがたいのは、……」

「働きかけの文は、「お前が行け！」のように、動作主体が「ガ」で表示されたとしても、その「ガ」は、中立的な叙述を示すものではなく、外の間人ではなくお前が、といった排他特立を表している。」

とある。

Ask 文は仁田 (ibid.) では「働きかけの文」ではなく、Confirm 文と同じく「問いかけの文」とされているようである。本研究では仁田 (ibid.) の「働きかけ」「問いかけ」の細部にわたって、主題・対比その他の現象を詳しく見たことになる。

3.2.1.2 Action の動作主性

RequestPromise-Action と Ask は、高い動作主性をもって行い得る動作の履行に関与する。たとえば「用紙を送る」「電話番号を告げる」などの動作は、高い動作主性をもって行い得る。対して「度を失う」などの動作は、高い動作主性をもって行い得ない。これらは RequestPromise-Not-Action の Action にのみなることができる。

例	* 「度を失って下さい」	(RequestPromise-Action)
	「度を失わないで下さい」	(RequestPromiseNot-Action)

3.2.1.3 Action 遂行の即時性

Ask 文は「わかりました」等と *Response* するだけで済ますことができず、聞き手は何らかの Value/Statement/Action を (知っている限り) その場で *Inform* する必要があるが、Request Promise-Action や RequestPromiseNot-Action は「わかりました」等と *Response* するだけで済ますことができる。そもそも電話対話の場合、話し手の *Demand* のパターンが、多くは下でなくであることに注意する必要がある。

1. 動作の遂行自体を *Demand* する

例。「お名前をおっしゃって下さい」→「おっしゃる」ことを要求

2. 動作遂行の約束を *Demand* する

例。「今日中に登録用紙を送って下さい」→「送る」ことを要求せず送る約束を要求

2. で要求されているのは 1. と違って、Action 遂行自体ではなく、Action 遂行の約束である。1. の場合は、その場で「わかりました」と応えるだけでは不十分であり、具体的な名前を言う (つまり Action を行う) 必要がある。名前を言った段階ではじめて要求者は満足し、対話は次の段階へ進むことができる。対して 2. の場合は、その場で「わかりました」と応えるだけで要求者は満足し、対話は次の段階へ進む。もちろん 2. の場合においても、話し手の最終的目標は「登録用紙を送らせること」ではあるが、「登録用紙を送ること」を *Demand* されたからといって聞き手が直ちに受話器から離れ、郵便局へ直行したのでは電話対話は破綻する。電話対話においては、話し手はそこまで (即ち Action の即時遂行まで) は *Demand* しておらず、Action 遂行の表明を *Demand* するにとどまる。Action 遂行の *Demand* のような形式をとりながら、実際には、Action 遂行の表明を *Demand* するにとどまっており、Action 遂行の表明 (つまり「わかりました」という *Response* で満足するという以上の事情は、電話対話の本質と直結するもので、決して軽視すべきものではなく、むしろ積極的に利用できるものと思われる。

まとめれば、電話対話においては、即時的に(電話口で)履行できる発話行為でないかぎり、「動作履行の Demand」は「動作履行表明の Demand」へと形を変えざるを得ないという事情があるわけである。

では、即時的に(電話口で)履行できる発話行為には、どのようなものがあるのだろうか？以下 A,B,C,D の4つが考えられる。

- A : 情報の伝達 ……Inform-Value/Statement/Action
- B : 許可の付与 ……Permit-Action
- C : 動作履行の約束 ……Promise-Action
- D : 動作不履行の約束 ……PromiseNot-Action

A は、知っている情報を教えるという動作である。これは電話口ですぐにできる。だからこそ、この動作の履行は電話会話においても Demand することができる。これが Ask や Confirm である。

B は、たとえば「どうしても構いません」と発話する、などといった動作で、これも電話口ですぐにできるがゆえに、電話会話で Demand の対象となり得る。許可の付与を Demand する情報伝達行為が RequestPermit-Action である。

同様に C を Demand する情報伝達行為が RequestPromise-Action であり、D を Demand する情報伝達行為が RequestPromiseNot-Action である。協調的対話においては、動作の履行約束(あるいは不履行約束)は表明者に、履行義務(あるいは不履行義務)を負わせるため、これらの約束を Demand することは、結果的には動作の履行(あるいは不履行)を要求するのと同等の効果を得ることになる。なお D の「不履行」の内容だが、本稿では「いまだ行われていない動作を行わないこと」だけでなく、「現在続行中の動作を中止すること」も含めておく。

3.2.1.4 願望表現との共起

Ask を果たし得る文に「どうか」「お願いですから」等の語句が生起するためには、その文が Confirm をも果たし得る文でなければならない。対して RequestPromise-Action や RequestPromise-Not-Action を果たし得る文では、その文が Confirm をも果たし得なくても「どうか」「お願いですから」が生起することはかなり容易である。⁴

下の例でいうと、1. の「電話番号は何番ですか」は Ask-Value は果たし得るが、Confirm、RequestPromise-Action、RequestPromiseNot-Action は果たし得ない。従って「どうか」が生起すると文が不適格になる(これを*で表す)2. は、Ask-Value だけでなく Confirm-Value/Statement/-Action をも果たし得るし、3. は RequestPromise-Action を、4. は RequestPromiseNot-Action を果たし得るので、「どうか」が生起しても適格である。

⁴尤も、たとえば「用紙を送ってもらえますか」は Confirm だけでなく、状況によっては RequestPromise-Action をも一応果たし得るものの、「どうか」の生起を許容しにくい。もちろん、「用紙を送ってもらえませんか」にすれば許容度はかなり上がる。

- | | |
|---|--|
| 例 | 1. * 「どうか電話番号は何番ですか」 (Ask-Value) |
| | 2. 「どうか電話番号を教えてください (Ask-Value)
しょうか」 |
| | 3. 「どうか用紙を送って下さい」 (RequestPromise-Action) |
| | 4. 「どうか会議に遅れないで下さい」 (RequestPromiseNot-Action) |

3.2.1.5 Ask 行為の即時性

Ask を果たす文は常に、即時的な 動作の履行しか要求しない。対して、RequestPromise-Action や RequestPromiseNot-Action を果たす文は、即時的でない動作の履行を要求することもある。

下の 1. でいうと、1. の Ask-Value は [電話番号を教える] という即時的な Ask の履行を要求するがゆえに、「そのうちに」という反即時的な語句の生起を許容しない。

- | | |
|---|---|
| 例 | 1. * 「 <u>そのうちに</u> ホテルの電話番号は何番ですか」 (Ask-Value) |
| | 2. 「 <u>そのうちに</u> ホテルの電話番号を教えてください (RequestPromise-Action)
さい」 |
| | 3. 「 <u>そのうちに</u> 用紙を送って下さい」 (RequestPromise-Action) |
| | 4. 「 <u>そのうちに</u> 用紙を送ってもらえませんか」 (RequestPromise-Action) |
| | 5. 「 <u>来月は</u> 電話番号を変更しないで下さい」 (RequestPromiseNot-Action) |
| | 6. 「 <u>来月は</u> 電話番号を変更しないでもらえませんか」 (RequestPromiseNot-Action) |

3.2.1.6 条件付要求

Ask を果たす文は常に、無条件の 動作の履行しか要求しない。これに対して、Request 系列の情報伝達行為を果たす文は、条件付きの Ask の履行を要求することもある。

下の 1. でいうと、1. の Ask-Value は [電話番号を教える] という無条件の Ask の履行を要求するがゆえに、「手紙で間に合わない場合は」という条件表現語句の生起を許容しない。

- | | | |
|---|------|---|
| 例 | 1. * | 「 <u>手紙で間に合わなければFAX</u> の番号は何番ですか」 (Ask-Value) |
| | 2. | 「 <u>手紙で間に合わなければFAX</u> の番号を教えてください」 (RequestPromise-Action) |
| | 3. | 「 <u>手紙で間に合わなければFAX</u> で送ってください」 (RequestPromise-Action) |
| | 4. | 「 <u>手紙で間に合わなければFAX</u> で送ってももらえませんか」 (RequestPromise-Action) |
| | 5. | 「 <u>午前中に雨が降りましたらバンカー練習場</u> はご使用にならないで下さい」 (RequestPromiseNot-Action) |
| | 6. | 「 <u>午前中に雨が降りましたらバンカー練習場</u> は使用しないでもらえませんか」 (RequestPromiseNot-Action) |

3.2.1.7 動作主の明示

Ask-Value/Statement/Action は、動作の行い手(聞き手)が文中で指定されることは(vocative以外)ないが、RequestPromise-Action や RequestPromiseNot-Action は動作の行い手がガ格やカラ格で指定されることがある。

- | | | |
|---|-------------------------|------------------------------|
| 例 | 「それをぜひともあなたが発表して下さい」 | (RequestPromise-Action) |
| | 「それをぜひともあなたから発表して下さい」 | (RequestPromise-Action) |
| | 「それをあなたが発表しないで下さい」 | (RequestPromiseNot-Action) |
| | 「 <u>田中さん</u> 、お電話番号は？」 | (<u>Vocative</u> Ask-Value) |

3.2.1.8 Confirm と Ask

Confirm と Ask との区別は、他の情報伝達行為どうしの区別にも増して、2章冒頭に挙げた形式面からの要請に基づいている。つまり、Response が基本的に YES/NO になるような質問を行う場合が Confirm であり、そうでない質問を行う場合が Ask となっている。

- | | | |
|---|---------------------|---------------------|
| 例 | どこで歓迎会が開かれますか。 | (Ask-Value) |
| | どこかで歓迎会が開かれますか。 | (Confirm-Statement) |
| | どこで歓迎会が開かれるかわかりますか。 | (Confirm-Statement) |

3.2.1.9 Confirm/Ask と Request

Confirm や Ask は、聞き手に動作(情報提供)を要求するという点で Request と類似している。この類似性は形式にも反映されている。たとえば「申し訳ありませんが」「おそれいりますが」

等の語句が生起できるのは、Request 文だけではない。Confirm 文や Ask 文にも生起できる。この場合、相手に情報提供してもらうことが「申し訳なく」、「おそれいる」のである。

例 | 申し訳ありませんが、〇〇先生のご連絡先
はどちらでしょうか。
おそれいりますが、当日の発表者は何人ぐ
らいでしょうか。

- 申し訳ありませんが ……Request の文・ Confirm の文・ Ask の文に生起する。
- おそれいりますが ……Request の文・ Confirm の文・ Ask の文に生起する。

3.2.1.10 Confirm/Ask と拒否応答

Confirm/Ask 系列の *Demand* は、(前提を否定しない限り) Reject できない。

例 3.5 | 質問者： 開演時間は何時ですか。 (Ask-Value)
事務局： * それはできません。
: よくわかりません。 (前提を否定)

3.2.1.11 Suggest/Offer 系列

「国際会議の参加に関する問い合わせ対話」に関する限り、Suggest/Offer 系列の情報伝達行為を果たす発話は、専ら事務局しか発しない。Suggest は 2 人称主語、Offer は 1 人称主語を基本とする。

Request 系列及び Confirm/Ask 系列では、話し手の利益のために *Demand* がなされる。対して Suggest/Offer 系列では、聞き手の利益のために *Demand* がなされる。(もちろん、たとえば道に迷って泣いている子供を哀れに思って「ボク、名前はなんていうの?」と Ask-Value の発話を発したからといって、子供の名前を知ることが質問者にとって何か実生活上の利益になるというわけではない。ここでいう「利益」とは、あくまで対話進展上の利益のことである。)

もちろん、Suggest する動作や Offer する動作は、行い手が意のままに行うことのできる動作である必要がある。

3.2.2 Response Class

ここでは特に InformAffirmative 及び InformNegative について、若干の説明を加えたい。

3.2.2.1 YES/NO 代用と省略

協調的な目標指向型の対話においても、Confirm-Value/Statement/Action を果たす発話に対して「はい」「いいえ」で応答しないことは十分有り得る。

例 3.6 | 事務局：どこで歓迎会が開かれるかご存知ですか。
質問者：歓迎会があるんですか。

例 3.7 | 事務局：どこで歓迎会が開かれるかご存知ですか。
質問者：知っています。

例 3.8 | 事務局：(当日は)どこで歓迎会が開かれるかわかりますか。
質問者：行けば何とかありますかねえ。

例 3.6は、質問の前提となっている知識(歓迎会がある)を質問相手が、自分は知らなかったと表明する場合である。一見、これは事務局の発話を発話スタックに置く場合と似ているが、実は異なる。というのは、質問者の問いかけに事務局が応えて発話クラスターが完成した後で、質問者が冒頭の事務局の問いかけに応えるとは考えられないからである。下の例 3.9を参照。

例 3.9 | 事務局：どこで歓迎会が開かれるかわかりますか。
質問者：歓迎会があるんですか。
事務局：はい。
質問者：そうですか。
 : ?? 私にはわかりません。

例 3.7は「はい」「いいえ」の省略と考えられる場合である。この場合、多くは質問文末尾の述部(ご存知だ)またはそれに類する述部を使用することになるが、特に肯定的な応答の際にはそれ以外の可能性も十分考えられる。

例 3.10 | 事務局：どこで歓迎会が開かれるかわかりますか。
質問者：第一ホテルです。

この場合、質問者の発話文は直接的には Inform-Value を果たすと言えるが、それでは事務局からの Confirm-Statement との発話クラスターが完成しない。その意味では「第一ホテルです」は Inform-Value から InformAffirmative-Statement に補正される必要があると言えるが、単純に補正してしまっただけでは、「第一ホテル」という新情報を質問者が提示したことが看過される結果となり、やはり好ましくないだろう。結論から言うと、上の例での「第一ホテルです」は 2

つの情報伝達行為を果たしている。それらは InformAffirmative-Statement と Inform-Value である。InformAffirmative-Statement は直前の事務局からの問いかけ (Confirm-Statement) と発話クラスターを作り、Inform-Value は、事務局が「そうですか」等の Understand で応答して発話クラスターを作ることもあるが、この応答は義務的ではなく、Inform-Value だけで単独に発話クラスターを構成することもある。

一般に、InformAffirmative または InformNegative に直続する Inform は、さらに後続する Understand と発話クラスターを構成することもあるが、Understand 発話の生起は任意的であり、Understand が生起しない場合、この Inform は単独で発話クラスターを構成することになる。下の例 3.11 を参照。上の例 3.10 の「第一ホテルです」は、ちょうどこの「はい。第一ホテルです。」と同様に扱われることになる。だからこそ、例 3.7 を「はい」「いいえ」の省略としているわけである。

例 3.11 | 事務局：どこで歓迎会が開かれるかわかりますか。
 質問者：はい。第一ホテルです。
 (事務局：そうですか。)

これまで説明してきた情報伝達行為については、発話と情報伝達行為の対応は 1 対 1 であった。しかし上のような場合には、この原則の例外として、1 つの発話が複数の情報伝達行為を果たすと考えるべきであろう。そして今後、表層レベルに近いインタラクションプランから、ドメインプランやダイアログプランのような高次のプランまでを本格的に視野におさめて考察を進めるにつれ、この原則はますます多くの例外を持つことになると予測できる。

例 3.8 は YES/NO いずれとも判断がつかねるという場合である。「さあどうでしょうか」等も同様で、敢えていえば < 応答保留 > とでもいう情報伝達行為を果たしていることになるが、「国際会議の参加に関する問い合わせ対話」を直接のデータとした本稿では、このような情報伝達行為を設定していない。

3.2.2.2 否定疑問の応答

InformAffirmative-Value/Statement/Action および InformNegative-Value/Statement/Action については、さらに所謂否定疑問に対する応答文の果たす情報伝達行為が問題とされることがある。たとえば下の例で、「はい、違います」「いいえ、そうです」が果たす情報伝達行為は、InformAffirmative なのか InformNegative なのか、という問題である。

例 3.12 | 質問者：会議は 3 時からではないのですか。
 事務局：はい、違います。

例 3.13 | 質問者：会議は 3 時からではないのですか。
 事務局：いいえ、そうです。

本稿の立場は、下に示すようなものである。まず、「はい」「いいえ」の直後に「、」が来ても「。」と同様に扱い、「はい」「いいえ」だけで文が完結すると見る。そして果たされる情報伝達行為が InformAffirmative か InformNegative かは、生起する形式が「はい」か「いいえ」かに正確に対応すると考える。これはそもそも Confirm が、応答発話が「はい」「いいえ」になるような質問という、極めてインターアクション寄りの視点から設定された情報伝達行為であることと対応している。「はい」「いいえ」に後続する「違います」「そうです」は Inform を果たすと考える。これは上述の「はい。第一ホテルです」の場合と同様である。

例 3.12	質問者：会議は3時からではないのですか。 事務局：はい、 : 違います。	(Confirm-Statement) (InformAffirmative-Statement) (Inform-Statement)
例 3.13	質問者：会議は3時からではないのですか。 事務局：いいえ、 : そうです。	(Confirm-Statement) (InformNegative-Statement) (Inform-Statement)

3.2.2.3 複数(並立) 要求と応答

複数種の Value 提示を要求する質問文についても、やはり上述の「第一ホテルです」と同様、複数の情報伝達行為を果たすと考えることが妥当だろう。下の例でいうと、「ご住所とお名前を仰って下さい」は複数の情報伝達行為 (Ask-Value と Ask-Value) を果たすと考えることができる。

例 3.14	事務局：ご住所とお名前を仰って下さい。 質問者：住所は京都市山科区竹鼻町 1-1。 : 名前は田中一郎です。	(Ask-Value & Ask-Value) (Inform-Value) (Inform-Value)
--------	--	---

3.2.2.4 YES/NO 応答と発話スタック

InformAffirmative の「はい」及び InformNegative の「いいえ」は、スタック発話に対する応答として用いにくい。たとえば下の例 3.15 末尾で、質問者の「会議は有料ですか」という問いかけに対して事務局が「はい」「いいえ」と応えることは「(でしたら) 無料です」と応えることと比べて不自然である。(なお、内側の発話クラスターを相手の発話が完成させたことを認め、外側のスタック発話に話題を戻す場合には、「(それ) でしたら」「(それ) だったら」「(それ) なら」をよく用いる。)

- 例 3.15
- | | |
|------------------------|--|
| 質問者： 会議は有料ですか。 | |
| 事務局： 失礼ですがあなたは会員の方ですか。 | |
| 質問者： 会員です。 | |
| 事務局： ?? はい。 | |
| : ?? いいえ。 | |
| : (でしたら) 無料です。 | |

但しこの「はい」「いいえ」の不自然さは絶対的なものではない。たとえば例 3.16のように、内側の対話の話題(= 会議)がスタック発話(= 会議は有料ですか)の主題と等しい場合、「はい」「いいえ」はかなり自然になる。

- 例 3.16
- | | |
|----------------|--|
| 質問者： 会議は有料ですか。 | |
| 事務局： どの会議ですか。 | |
| 質問者： 全体会議です。 | |
| 事務局： はい。 | |

3.2.2.5 Confirm による間接要求への応答

なお、直接的には Confirm を果たす発話が間接的に別の情報伝達行為を果たしている場合、その間接的な情報伝達行為にだけでなく、直接的な Confirm によっても InformAffirmative の「はい」や InformNegative の「いいえ」によって応答することができる。

- 例 3.17
- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 質問者： 用紙を送っていただけませんか。 | (直接的には Confirm。 |
| : | 間接的には RequestPromise-Action) |
| 事務局： はい。 | (InformAffirmative) |
| : 送ります。 | (Promise-Action) |

3.2.2.6 応答の話題の属性

Inform にせよ InformAffirmative にせよ、あるいは InformNegative にせよ、[話題の属性] が Value か Statement か Action かということが問題になる。[話題の属性] を決定するには、少なくとも 3 つの手段が考えられる。

まず、名詞句指示物のシソーラスを整備させていくことによって、[話題の属性] の可能性を絞り込むことが考えられる。勿論、限界はあるが、或る程度は可能であろう。

次に、発話クラスターを構成する発話間で、[話題の属性] が一致することに注目する手段が考えられる。つまり発話クラスターを構成する発話のうち、1 文が果たす情報伝達行為の [話題の属性] がわかれば、自動的に他の文についても [話題の属性] を決定できる。たとえば「どうしたらいいのでしょうか」が一意的に Ask-Action であり、従って [話題の属性] が Action で

あることなどは、7章に述べる個別的規則によって具体的に導かれるので、対する返答の「話題の属性」も、一意的に Action とわかる。

さらに、文形式から「話題の属性」を絞れることが有る。

- (T-1) 「固有名詞 / 値 / 値を訪ねる疑問詞」 (です)(か etc.)
 …… 「話題の属性」は原則として Value。但し文脈によっては Action。
- | | | |
|---|-------------------|-----------------|
| 例 | 「開催地はどこですか」「東京です」 | (Inform-Value) |
| | 「支払先はどこですか」「東京です」 | (Inform-Action) |
- (T-2) 「動詞連用形」たいのです (か etc.)
 …… 「話題の属性」は原則として Statement。
- | | | |
|---|----------------|--------------------|
| 例 | 「京都見物もしたいのですが」 | (Inform-Statement) |
|---|----------------|--------------------|
- (T-3) お「連用名詞」です (か etc.)
 …… 「話題の属性」は原則として Statement。
- | | | |
|---|---------------|---------------------|
| 例 | 「予約はもうお済みですか」 | (Confirm-Statement) |
|---|---------------|---------------------|
- (T-4) 「(銀行) 振込 / 先払い / 後払い / 現金払い / ……」です (か etc.)
 …… 「話題の属性」は原則として Action。
- | | | |
|---|-----------|-----------------|
| 例 | 「料金は振込です」 | (Inform-Action) |
|---|-----------|-----------------|
- (T-5) 「要る / 必要 / ……」です (か etc.)
 …… 「話題の属性」は Statement。
- | | | |
|---|----------------|---------------------|
| 例 | 「登録料はいるのでしょうか」 | (Confirm-Statement) |
|---|----------------|---------------------|
- (T-6) 「動詞連用形撥音便」ています (か etc.)
 …… 「話題の属性」は原則として Statement。
- | | | |
|---|---------------------|--------------------|
| 例 | 「去年の会場はとても混んでいましたか」 | (ConfirmStatement) |
|---|---------------------|--------------------|
- (T-7) (「行為名詞」は) 「形容詞 / 形容名詞」です (か etc.)
 …… 「話題の属性」は原則として Statement。但し文脈によっては Action。
- | | | |
|---|----------------------|--------------------|
| 例 | 「発表は多いですか」「発表は多いです」 | (Inform-Statement) |
| | 「出席は任意ですか」「出席は義務的です」 | (Inform-Action) |
- (T-8) 「形容詞 / 形容名詞」のです (か etc.)
 …… 「話題の属性」は原則として Statement。
- | | | |
|---|---------------|--------------------|
| 例 | 「あまり予算がないのです」 | (Inform-Statament) |
|---|---------------|--------------------|
- (T-9) 最終文節に「可能の要素」が生起する
 …… 「話題の属性」は原則として Statement。但し分脈によっては Action。

例	「延長はできませんか」	(Confirm-Statement)
	「お願いですから延長できませんか」	(RequestPermit-Action)

(T-10) [疑似分裂文]

…… [話題の属性] は原則として Value。但し文脈によっては Action。

例	「欠席しているのは誰ですか」	
	「欠席しているのは田中さんです」	(Inform-Value)
	「会議場に行くのはどの道ですか」	
	「会議場に行くのは国道です」	(Inform-Action)

但し、「(か)と思います」「(か)と存じます」等の文は、これらの形式を除外した上で [話題の属性] を考える必要がある。たとえば「東京です」が Inform-Value である以上「東京かと思います」も Inform-Value と推定される必要がある。

3.2.2.7 RequestPromise-Action と Inform-Action

Inform-Action 発話は RequestPromise-Action 発話とよく似ているが、相違点もある。RequestPromise-Action 発話は、話し手が利益を要求する発話だが、Inform-Action 発話は、Suggest/Offer 系列と同様、聞き手の利益のための発話である (従って RequestPromise-Action 発話と違って、相手から Thanks 発話が返ってくることもある)。さらに RequestPromise-Action 発話は前述のとおり、必須格名詞句を主題にできないが、Inform-Action 発話は主題にできる。また RequestPromise-Action 発話には「ノダ」が生起しないが、Inform-Action 発話には生起できる。下の例を参照。

例	1. ?? 用紙は送って下さい。	(RequestPromise-Action)
	用紙は送って下さい。	(Inform-Action)
	2. ?? 用紙を送るのです。	(RequestPromise-Action は可能だが本稿の対象外)
	用紙を送るのです。	(Inform-Action)

3.2.3 Confirmation Class

3.2.3.1 Understand

Understand とは、従来 Confirmation と呼ばれていたものである。インタラクションプラン上の Confirmation とまぎらわしいので、本稿では Understand と名を改めている。

先行する相手の発話に、新情報が少ない場合、「わかりました」「そうですか」という Understand 発話で応えることは若干むずかしくなる。もっとも、ここでいう「新情報が少ない」とは便宜的な表現であって、具体的には、たとえば下の例 3.18 における事務局の Promise-Action

発話を指す。この発話は、質問者の要求を全面的に受け入れることの表明にすぎず、対話の主導権は完全に質問者にある。このような事務局の発話に対して、質問者は「わかりました。」「そうですか。」などと応えることは不自然である。

例 3.18

質問者：	用紙を送って下さい。
事務局：	ではそうします。
質問者：	?? わかりました。
:	?? そうですか。

もちろん例 3.19 のような対話も考えられるが、この場合の事務局の発話は質問者にとって、少なくとも当然の発話ではない、むしろ意外な発話と考えられるから、新情報の多い発話と言える。したがって例外ではない。

例 3.19

質問者：	用紙を送って下さい。
事務局：	ではそうします。
質問者：	そうですか。それは助かります。

また例 3.20 のように、事務局が色々な事情を表現すれば、これは質問者にとって新情報となるから、質問者は「わかりました」「そうですか」などと自然に応えることができる。

例 3.20

質問者：	用紙を送って下さい。
事務局：	では今日中になんとかそうします。
質問者：	わかりました。
:	そうですか。

「そうですね」という Understand 発話で応えることができるのは、Suggest-Action 発話に対してのみである。また、「はい」という Understand 発話で応えることができるのは、Suggest-Action 発話や Offer-Action 発話に対してのみである。

3.2.3.2 Yorosiku

「よろしく願います。」等といった Yoroshiku 発話で応えることができるのは、基本的に、Promise-Action や Offer-Action など、相手自身が履行義務を負う Demand 発話に対してのみである。

但し実際にはそれ以外の場合にも、Yoroshiku 発話で応えることは有る。たとえば下の例のように、事務局が Promise-Action 発話や Offer-Action 発話をなしていない時点でも、「状況のセッティング等、取り計らいを万事よろしくたのむ」という意志の表明として、Yoroshiku 発話をなすことができる。

例 3.21	質問者：もしもし。	(GreetingOpen)
	: 参加事務局ですか。	(Confirm-Value)
	事務局：はい。	(InformAffirmative-Value)
	質問者：会議の正確な開始時間を教えてください。	(Ask-Value)
	事務局：13時30分です。	(Inform-Value)
	質問者：わかりました。	(Understand)
	: <u>では当日よろしくお願ひします。</u>	(Yoroshiku)
	事務局：こちらこそよろしくお願ひします。	(Yoroshiku)
: お待ちしております。	(Offer-Action)	

このような Yoroshiku を、*Confirmation Class* ではなく *Demand Class* に含めることも考えられるが、Yoroshiku はたとえば RequestPromise-Action などと違って、(特に協調的な対話では) まず Reject できないこと、問題の Action が縛然としていること等から、*Confirmation Class* とした。また、挨拶的機能に注目すれば、ダイアログプランに関わる情報伝達行為とすることも可能かもしれないが、本稿ではその可能性は追求していない。

3.2.3.3 Zannen

「それは残念です。」等という Zannen 発話で応えることができるのは、第一に、RejectPromise-Action や

RejectPermit-Action といった、Reject する *Response* 発話に対してである。その他、Inform-Negative や Inform 等の *Response* 発話に対しても、その *Response* 発話が発話者にとり都合の悪いものである限りにおいて、「それは残念です。」という Understand 発話で応えることができる。

4 発話クラスター

4.1 関連するプランによる特徴

2.2節で挙げたように、発話クラスターには大きく分けて、ダイアログプランに関わる発話の発話クラスターと、コミュニケーションプランに関わる発話の発話クラスターがある (Inform と Aiduchi が構成する発話クラスター (C-23) にはここでは触れない)。ここで両者の相違を述べておく。簡単のため、前者をダイアログプランの発話クラスター、後者をコミュニケーションプランの発話クラスターと呼んでおく。

ダイアログプランの発話クラスターとコミュニケーションプランの発話クラスターとは、3つの大きな違いを持つ。それを下のに記す。

1. ダイアログプランの発話クラスターでは、発話クラスターを構成する発話は常に、単一の情報伝達行為の反復によって構成される。対してコミュニケーションプランの発話クラスターは、単一の情報伝達行為の反復では構成されない。
2. ダイアログプランの発話クラスターは常に、前半部と後半部の2つに分けられ、両部の発話者は互いに異なる。たとえば前半部の発話者が事務局なら、後半部の発話者は質問者である。対してコミュニケーションプランの発話クラスターは、3部以上に分けられることもあり、同一発話者の発話が異なる部に属することもある。
3. ダイアログプランの発話クラスターを構成する発話は、下の例のような僅かな対話を除けば、発話スタックに置かれることが無い。対してコミュニケーションプランの発話クラスターを構成する発話は、発話スタックに置かれることがある。

例 4.1	質問者： <u>おはようございます。</u>	(GreetingOpen)
	: 先日の田中太郎です。	(Inform-Value)
	事務局： ええと、田中太郎様、でいらっしゃいますか？	(Comfirm-Value)
	質問者： はい、田中です。	(InformAffirmative-Value)
	: 登録用紙のことで先日お電話した。	(Inform-Statement)
	事務局： ああ、あの田中様ですか。	(Confirm-Value)
	: <u>おはようございます。</u>	(GreetingOpen)

4.2 情報伝達行為の曖昧性の削除

たとえば、「～してください。」という形式の発話に対して、Inform-Action と Ask-Value という2つの情報伝達行為を区別して設けているのは、次のような例において発話クラスターを状況に応じてうまく構築していくためである。そして、それが成功しているかぎりにおいて、Inform-Action と Ask-Value との区別は、妥当なもののみなすことができる。

- 例 4.2
- | | | |
|------|-----------------------|-----------------|
| 質問者： | 参加の手続きはどうしたらいいんでしょうか。 | (Ask-Action) |
| 事務局： | まず会員番号をおっしゃってください。 | (Inform-Action) |
| ： | | or (Ask-Value) |

質問者の発話は Ask-Action という情報伝達行為を行っている。これに対する事務局の発話はいまいな発話で、Inform-Action とともに、Ask-Value ともとれる。Inform-Action である場合、事務局の発話は質問者の発話と発話クラスターを構成し、結果として質問者の発話は発話スタックから消える。事務局の発話が Ask-Value である場合は、事務局の発話は質問者の発話と発話クラスターを構成せず、質問者の発話は発話スタックに残る。

次の例も基本的に同様と考えられる。つまり事務局の発話が、RequestPermit-Action なのか Inform-Value なのかによって、発話クラスターの構築が影響される。

- 例 4.3
- | | | |
|------|---------------------|------------------------|
| 質問者： | 手続きはどれぐらいかかるのでしょうか。 | (Ask-Value) |
| 事務局： | 少々お待ちください。 | (RequestPermit-Action) |
| ： | | or Inform-Value) |

また、たとえば下の例において、質問者が「はい。」としか発話していないために、事務局がこれに応じて発話することができない。つまり、事務局と質問者の発話が構成する発話クラスターは、この「はい。」で完成する。「はい。」の次に事務局が何か発話するとすれば、それは別の新しい発話クラスターを構成する発話である。2章で示した発話クラスターを考えれば、このようなことは全て予測できる。

- 例 4.4
- | | | |
|------|---------------------------------------|----------------|
| 事務局： | 用紙を送らせていただきます。 | (Offer-Action) |
| 質問者： | はい。 | (Understand) |
| 事務局： | * はい。 * わかりました。 * そうですか。
* 承知しました。 | |

5 スタック発話

複数の発話が情報伝達行為の上で発話クラスターが作れるからといって、直ちにその複数の発話を結び付けることには、問題がある。たとえば下の例では、事務局の Ask-Value 発話に対し、質問者が Inform-Value 発話をしているからといって、直ちにこの2発話を結び付けて発話クラスターを完成させるというのでは、正しい発話クラスターが得られたことにはならない。

例 5.1	事務局： お名前をお聞かせ下さい。	(Ask-Value)
	質問者： あの私、アメリカ人なんです。	(Inform-Value)
	事務局： はい。	(Aiduchi)
	質問者： 姓と名前のどちらから言えばよろしいでしょう。	(Ask-Value)
	事務局： 名前からで結構です。	(Inform-Value)
	質問者： レイコ・タナカです。	(Inform-Value)
	事務局： わかりました。	(Understand)

つまり、或る発話を発話スタックに置くべきかどうかは、厳密に言えば、その発話が果たす情報伝達行為だけでは、わからないことが有る。

既に述べたとおり、1つの発話文が同時に複数の情報伝達行為を果たし得る以上、1つの発話文が同時に複数の発話クラスターを完成させてもよいはずである。事実、「わかりました」には、そのような機能がある。「わかりました」は最深のスタック発話の発話クラスターのみを完成させる場合の他に、全ての発話クラスターを完成させ、発話スタックを一掃する場合がある。下の例がその場合で、「わかりました」は、少なくとも Inform-Value 発話、InformAffirmative-Value 発話、Inform-Action 発話の3つに同時に応えており、3つの発話クラスターが完成している。1.2.4 節においても、2つの発話クラスターを2つの Thanks 発話が完成させている例を見た。

例 5.2	質問者： 用紙を送って下さい。	(RequestPromise-Action)
	事務局： どの用紙ですか。	(Ask-Value)
	質問者： 参加申込の用紙です。	(Inform-Value)
	事務局： 6月の会議の参加ですね。	(Confirm-Value)
	質問者： はい。	(InformAffirmative-Value)
	: 送付先はオフィスの方で結構です。	(Inform-Action)
	事務局： わかりました。至急送ります。	

6 特定の情報伝達行為を果たす節にしか生起しない語句

特定の情報伝達行為を果たす節にしか生起しない語句があり、ここではそれらの語句について記述したい。それらの記述も勿論、個々の発話文が対話の中で果たす情報伝達行為の割り出しに役立つと考えられる。

なお、本節冒頭では「特定の情報伝達行為を果たす節」と述べたように、本稿では情報伝達行為を果たすのは、文だけではないと考えている。文を構成する節も情報伝達行為を果たすと考えることが、少なくとも以下の語句の生起を正しく予想するためには必要と思われるからである。もう少し具体的に言うと、たとえば「神戸から行くのですが、朝が早いので京都に宿泊したいと思いますが、そちらでホテルの手配はしていただけますか？」という文の下線部に接続助詞「ので」が生起することは、この文を少なくとも次のように3分割して、3つの節について情報伝達行為を考えなくては、予測できないと思われるからである。3章で記した「もしもし」、「はい、」や「いいえ、」に関する本稿の処理も、これと並行するものと言える。

[神戸から行くのですが]	(Inform-Value)
[朝が早いので京都に宿泊したいと思いますが]	(Inform-Statement)
[そちらでホテルの手配はしていただけますか?]	(Confirm-Statement)

ちなみに、以下の記述には文内部の依存階層構造が重要な前提となっている箇所もあり、依存階層構造の詳細は三上(1967,1972)・南(1974)・益岡(1987)・田窪(1987)・沼田(1989)・郡司(1990)等を参照されたい。

接続助詞「ので」 まず、上でも触れた接続助詞「ので」について。(あくまで接続助詞についての記述であり、従ってたとえば「青い方は値段が高いから、その赤いので我慢しなさい」のような「準体助詞の+格助詞で」の場合は扱わない。)接続助詞「ので」が生起する節は節末が「ノダ」「訳ダ」でない限り、Confirmを果たさない。例を参照。

例	ぜひ出席したいので用紙を送って下さい。	(RequestPromise-Action)
	* ぜひ出席したいので用紙は送ってもらえますか。	(Confirm-Statement)
	こちらからお送りしますのでご住所をお聞かせ願えますか。	(Ask-Value)
	期日前ですので、通常料金になります。	(Inform-Statement)
	* 期日前ですので、通常料金になりますか。	(Confirm-Statement)
	会議参加者なので少しは安くなるんでしょうね。	(Confirm-Statement)

副詞「どうせ」 副詞「どうせ」が生起する節はInformかConfirmしか果たさない。Confirmの場合、節末にデショが生起する。

例	どうせ前と同じ発表ですよ。	(Inform)
	どうせ前と同じ発表 <u>でしょう</u> ？	(Confirm)
	* どうせ新しい発表をして下さい。	

副詞「どうぞ」 副詞「どうぞ」が生起する節は Inform-Action か Perimit-Action、あるいは Offer-Action を果たす。

例	どうぞ申込書をお早くお送り下さい。	(Inform-Action)
	どうぞご自由にご利用下さい。	(Permit-Action)
	どうぞご遠慮なく何なりとお申しつけ下さい。	(Offer-Action)
	い。	

副詞「せっかく」 「せっかく」が生起する節は Inform を果たす。

例	せっかく来たのだから、	(Inform)
	せっかく来たのに	(Inform)

副詞「きっと」 「きっと」の生起可能性について、やはり文の表層的な区別が有意であることを見る。まず、以下のような推量の副詞は、Inform を果たす発話文にしか生起しないのが原則である。

例	* きっと用紙を送って下さい。	(RequestPromise-Action)
	* きっと [無理ですか]。	(Confirm-Statement)
	cf. 「きっと無理」ですか。	(Confirm-Statement)
	* どうやら用紙を送って下さい。	(RequestPromise-Action)
	* どうやら [無理ですか]。	(Confirm-Statement)
	cf. 「どうやら無理」ですか。	(Confirm-Statement)
	* たぶん用紙を送って下さい。	(RequestPromise-Action)
	* たぶん [無理ですか]。	(Confirm-Statement)
	cf. 「たぶん無理」ですか。	(Confirm-Statement)
	* おそらく用紙を送って下さい。	(RequestPromise-Action)
	* おそらく [無理ですか]。	(Confirm-Statement)
	cf. 「おそらく無理」ですか。	(Confirm-Statement)

ところで RequestPromise-Action を直接的に果たす文 (つまり命令文) は、ネの付加によって、当該行為の履行義務確認 (Confirm) を果たす文になる。RequestPromise-Action を間接的に果たす文 (つまり疑問文) は、ネの付加によってこのような変化は生じない。

例	用紙を送って下さい。	(Request Promise-Action・直接的)
	用紙を送って下さいね。	(あなたは「用紙を送る」という行為の履行義務が有ると思うがそのとおりか、という Confirm-Statement)
	用紙を送って下さいませんか。	(Request Promise-Action・間接的)
	用紙を送って下さいませんかね。	(Request Promise-Action・間接的)

従って「きっと」は、直接的な Request Promise-Action 文にネが付加された文には生起できるが、間接的な Request Promise-Action 文にネが付加された文には生起できない。

例	きっと送って下さいね。	(Confirm-Statement)
	* きっと送って下さいませんかね。	

なお、上に挙げた「たぶん」「おそらく」は、文末に「デショ」「ネ」が生起すれば、Confirm 文に生起できる。

例	たぶん一般室は満員でしょ？	(Confirm-Statement)
	たぶん発表者は田中先生ですね？	(Confirm-Value)
	おそらく一般室は満員でしょ？	(Confirm-Statement)
	おそらく発表者は田中先生ですね？	(Confirm-Value)

副詞「どうか」 副詞「どうか」が生起する節は、少なくとも直接的・間接的のいずれかにおいて Request 系列の節でなければならない。(「できるかどうかわかりません」等の「どうか」はここでは関係しない)

例	どうか用紙を送って下さい。	(Request Promise-Action)
	どうかご住所を仰って下さい。	(直接的には Request Promise-Action、間接的には Ask-Value)
	どうか用紙を送って頂くわけにいきませんかでしょうか。	(直接的には Confirm-Statement。間接的には Request Promise-Action)
	どうかご住所を送って頂くわけにいきませんかでしょうか。	(直接的には Confirm-Statement。間接的には Request Promise-Action さらに間接的には Ask-Value)

副詞「せめて」 「せめて」が生起する節は、少なくとも直接的・間接的のいずれかにおいて Request 系列か Suggest/Offer 系列、あるいは Inform-Action を果たす。

例	せめてお名前を仰って下さい。	(直接的には RequestPromise-Action、 間接的には Ask-Value)
	せめて宿泊費用ぐらいはご負担下さい。	(RequestPromise-Action か Inform-Action)
	せめて宿泊費用ぐらいはご負担いただけませんか。	(直接的には Confirm-Statement。間 接的には RequestPromise-Action)
	せめて宿泊費用ぐらいは負担させて頂きま す。	(Offer-Action)
	* せめてご住所はどこですか。	

「くせに」 「くせに」が生起する節は、Inform か RequestPromiseNot-Action を果たす。

例	あの人は若いくせに生意気です。	(Inform-Statement)
	若いくせに文句を言うな。	(RequestPromiseNot-Action)
	若いくせに文句を言わないでもらえるかな。	(RequestPromiseNot-Action)
	* 若いくせに用紙を送れ。	

接続詞「ところで」 最後に、接続詞「ところで」に関する現象を見る。協調的対話において命令文の形式を備えた直接的な Request の対象となり得る行為 (Action) は、聞き手がその対話中で既に、履行可能を保証している行為に限定される。対して間接的な Request 発話では、聞き手が履行可能を保証していない Action をも履行要求できる。

接続詞「ところで」は、対話に新規に話題を導入する機能を果たす。従って、話し手が「ところで」に続けて Request を行う場合、Request の対象となるのは、聞き手がその対話中で履行可能を未だ保証していない行為である。協調的対話においては、これを直接的に命令文形式で Request することはできないが、間接的な形式では Request できる。下の例を参照。

例	1. ?? ところで、恐れ入りますが箱の中を覗いて 下さい。 (命令文で直接的 Request)
	2. ところで、恐れ入りますが箱の中を覗いて もらえますか。 (疑問文で間接的 Request)

接続詞「さて」 「ところで」に対して接続詞「さて」は、対話において既に導入されていた(がしばらく触れられなかった)話題を再度取り上げる機能を果たす(ここでは、「さてどうしたものか」等の「さて」は扱わないものとする)。従って、話し手が「さて」に続けて Request を行う場合、Request の対象となる行為の履行可能を、聞き手がその対話中で既に保証していれば、これを直接的に命令文形式で Request することも、間接的に平叙文や疑問文形式で Request することもできる。たとえば手品師が、「手伝う」ことを約束して舞台上上がった(従って行為の履行可能を保証している)観客に対して発する Request は、直接的であっても間接的であってもかまわない。下の例を参照。

例

1. さて、恐れ入りますが箱の中を覗いてもら
えますか。 (疑問文で間接的 Request)
2. さて、恐れ入りますが箱の中を覗いて下さ
い。 (命令文で直接的 Request)

1. Confirm-Action

R- 7	(～) 疑問なし～バ いい (の) デス & か			
	聞カセテ + ご教示(して)	頂く 下さる	(ね) (* 但し前接動詞は命令形) (ます) ようお願い	(致) します 申上げます

1. Confirm-Action

R- 8	(～) 疑問なし～バ いい (の) デス & か	
	聞カセテ + ご教示(+して) + モラエル &	モラエル & 願える & ナイデスカ.

1. Confirm-Action

R- 9	(～) 疑問なし～バ いい (の) デス & か	
	聞カセテ + モラエル & ご教示(して) 願える	+ バ + ウレシイ。

1. Confirm-Action

R- 10	ヤリ方ヲ	聞カセテ + ご教示(+して) + モラエル &	モラエル & 願える &	ナイデスカ.
-------	------	-----------------------------	-----------------	--------

1. Ask-Action

R- 11	ヤリ方ヲ	聞カセテ + ご教示(して)	頂く 下さる	(ね) (* 但し前接動詞は命令形) (ます) ようお願い	(致) します 申上げます
-------	------	-------------------	-----------	----------------------------------	------------------

1. Ask-Action

R- 12	ヤリ方ヲ	聞カセテ + apr ご教示(して) 願える	モラエル &	+ バ + ウレシイ。
-------	------	---------------------------	--------	-------------

1. Ask-Action

R- 13	(～)	シテ + モラエル & オ VN + 願える	ナイデス + か.
-------	-----	---------------------------	-----------

1. RequestPromise-Action

R- 14 || (～) | シテ + モラエル & | + バ + ウレシイ。 ||
 || | VN + 願える | ||

1. RequestPromise-Action

2. Yoroshiku

R- 15 || (～) | 動詞 | + させる + て + モラエル & + ナイデス + か。 ||
 || | VN | ||

1. RequestPermit-Action

R- 16 || (～) | 動詞 | + させる + て + モラエル & + バ + ウレシイ。 ||
 || | VN | ||

1. RequestPermit-Action

R- 17 || (～) | ((オ)VN) + | モラエル & | | ナイデス + か。 ||
 || | | できる | | ||
 || | (動詞 + 可能)& | | ||

1. RequestPromise-Action (主語名詞句指示物が聞き手の場合が多い)

2. RequestPermit-Action (主語名詞句指示物が話し手の場合が多い)

- オ VN が現れれば、主語名詞句指示物は第3者でなければ聞き手であり、聞き手の時には RequestPromise-Action になりやすい。
- ナイデスが具体的に「でしょう」という形式で現れる時は、RequestPromise-Action の可能性は低い。

R- 18 || | 動詞連用形 | 下さい (終止形)。 ||
 || | オ VN | ||

1. RequestPromise-Action

2. Inform-Action

3. Suggest-Action

R- 19 || (～) 動詞 + ない + で + 下さい (+ 終助詞)。 ||

1. RequestPromiseNot-Action

R- 20 || (～*) は困ります (+ 終助詞)。 ||

* 但し(～)には、当該文脈下で何らかの行為を指示する語が現れる。

(例) 「郵送は困ります。」 「東京は困ります。」 「それは困ります。」

1. RequestPromiseNot-Action

2. Reject-Action

3. Refuse-Action

R- 21		~		お + 電話 / 聞き / 尋ね / 問い合わせ / 申しつけ		下さい(ね)。	
				ご + 質問 / 相談 / 用命			
				(お) 電話して (+ きて)			
				(お) 電話をかけて (+ きて)			

1. Offer-Action

「尋ねて下さい」は Inform-Action 等の情報伝達行為を果たす発話の文末形式としては自然だが、Offer-Action を果たす発話の文末形式としてはやや不自然。

R- 22 || そうですか。 ||

1. Understand

2. Aiduchi

R- 23 || そうですね。 ||

1. Inform-Value/Statement/Action

2. InformAffirmative-Value/Statement/Action

「そうですね」には話し手が、これから話そうとする情報を吟味推敲中であることを示す場合がある(英語の“well”に近い)。「国際会議の参加に関する問い合わせ対話」においても、会話番号(K3071)中に1度現れている。が、今回はこれは考察から除外する。

R- 24 || どう (致) しましょう (か). ||

1. Ask-Action

R- 25	(～)	動詞未然形 + させていただきます。	
		動詞連用形 + ます。	
		(オ)VN (致) します。	
		(致) しましょう。	
		(致) しましょうか。	

1. Offer-Action

R- 26 || ～でしょう。 ||

1. Inform

2. Ask

R- 27 || もしもし。 ||

1. GreetingOpen

R- 28 || おはようございます。 ||

1. GreetingOpen

R- 29 || はい。 ||

1. GreetingOpen

2. Aiduchi

3. InformAffirmative-Value/Statement/Action

4. Understand

5. Promise-Action

6. GreetingClose

(但し GreetingClose 発話が先行する場合に限る。この場合は専ら GreetingClose)

R- 30 || (では) | どうも
 さようなら | 。 ||
 (どうも)失礼(致)します
 (どうも)失礼(致)しました ||

1. GreetingClose

R- 31 || わかりました。 ||

1. Understand
2. Promise-Action
3. Permit-Action

R- 32 || かしこまりました。 ||

1. Promise-Action
2. Understand

R- 33 || 承知(致)しました。 ||

1. Promise-Action
2. Understand

R- 34 || そうです(よ)。 ||

1. InformAffirmative-Value/Statement/Action

R- 35 || どうぞ。 ||

1. Permit-Action

R- 36 || 他に何か。 ||

1. Confirm-Statement

1. Offer-Action

R- 43 || いいえ。 ||
 || いいえ、 ||

1. InformNegative-Value/Statement/Action

2. RejectPromise-Action

3. RejectPermit-Action

R- 44 || ~ | できません | (接続助詞) (終助詞)。 ||
 || | しかねます | ||
 || | しかねるので(ごぞいま)す | ||

1. RejectPromise-Action

R- 45 || (～) | 動詞連用形 + たら / ては | | いかが | です & (力)。 ||
 || | 動詞終止形 + と | | どう | ||

1. Suggest-Action

R- 46 || (～) | シテ | | 頂くことが必要です | (接続助詞) (終助詞)。 ||
		VN		頂かざるを得ません		
			頂く必要が有ります			
			頂かなくてはなりません			

1. RequestPromise-Action

R- 47 || (～) お願い(致)します ||

1. RequestPromise-Action

2. Yoroshiku

R- 48 || ～願えますか。 ||

1. RequestPromise-Action

R- 49 || 有難うございます。 ||

1. Thanks

R- 50 || どういたしまして。 ||

1. Welcome

R- 51 || ~ | ます / です / ました / でした (よ / が / けれど / けれども / から / ので) | 。 ||
| まして / でした (ね) |

1. Inform-Value/Statement/Action

2. Offer-Action

(主語は1人称。自分の意志でコントロールできる動作が~に表現される)

3. Promise-Action

(但し相手の Request Promise-Action 発話が先行している場合に限る。主語は1人称。自分の意志でコントロールできる動作が~に表現される)

R- 52 || ~か. ||

1. Ask-Value/Statement/Action

2. Confirm-Value/Statement/Action

次の(1)(2)が共に満たされる場合、または、(1)(3)が共に満たされる場合に限り Ask-Value/Statement/Action。他の場合は Confirm-Value/Statement/Action。但し、(2)(3)でいう「か」とは文末の「か」を含まないとする。

(1) 疑問詞が文中に生起している。

(2) 疑問詞(または疑問詞を含む構成単位)に「か」が後接しない。

(3) 疑問詞(または疑問詞を含む構成単位)に「か」が後接し、さらに「(を)仰って下さい」が後接する。

R- 53 || [Confirm 文か]。[それとも + Confirm 文か]。 ||

1. Ask-Value/Statement/Action

R- 54 || ~する必要はありますか。 ||

1. Offer-Action

R- 55 || ~ね. ||

1. Confirm-Value/Statement/Action

2. Ask-Value/Statement/Action

3. Inform-Value/Statement/Action

3. になる十分条件は、ネに以下の形式が前接すること。

です / だろう / ます / ません でした / ました / でしょう できて / まして	「か」以外の終助詞 接続助詞
--	-----------------------

R- 56 || ~な。 ||

1. Confirm-Value/Statement/Action

2. Ask-Value/Statement/Action

R- 57		オ VN		下さって 頂いて されて		も		結構です 構いません		。	
-------	--	------	--	--------------------	--	---	--	---------------	--	---	--

1. Permit-Action

R- 58 || ご用件 / 質問 をうけたまわります。 ||

1. Offer-Action

R- 59		オ VN		頂きたいと思います お願い(致)します		。	
-------	--	------	--	------------------------	--	---	--

1. AcceptOffer-Action

2. RequestPromise-Action

R- 60 || ~シテ頂きましょうか。 ||

1. AcceptOffer-Action

2. RequestPromise-Action

8 対応規則の評価

この章では、7章で提示した、情報伝達行為と文形式との対応規則を吟味し、評価したい。

8.1 調査方法

調査の対象とした対話は、ATR 自動翻訳電話研究所の言語データベース ADD 中の「国際会議の参加に関する問い合わせ対話」である。7章に挙げた諸形式ごとに、その形式を満たす文を、前後の発話文脈ごと抽出し、実際に果たされている情報伝達行為が規則の予想通りかどうかを調査した。抽出は LDBSH を用い、実際に果たされている情報伝達行為の判断は筆者が下した。果たしている情報伝達行為について、複数とおりの可能性を許容する文形式は、7章以外での記述を満たす形で適切な発話クラスターが完成できる方を選択した。⁵

8.2 評価

調査の結果、7章の対応規則は 100 % の高い正解率を得た。これまでも触れてきたとおり、「国際会議の参加に関する問い合わせ対話」は、特に次の 2 点において完全に中立的なデータとは言えず、また筆者が下した情報伝達行為の判断も、率直に言って曖昧な点や誤りが皆無とは言いきれないかもしれない。

1. 対話によって得られる利益に関して、2 人の対話者の立場は完全に均等なものではなく、サービス要求側とサービス提供側への分化が見られる。(たとえば Request Promise-Action 発話は質問者しかせず、Offer-Action 発話は事務局しかしない。)
2. 対話のイニシアチヴに関して、2 人の話者の立場は完全に均等なものではなく、開始・終了についてはイニシアチヴは質問者にある。(Greeting Close は質問者が先に発話する。)

しかし上の正解率は、発話と情報伝達行為とを結び付ける試みの第一段階としては、満足なものと考えられる。今後は対象となる対話に少しずつヴァリエーションを持たせていくことによって、対話者の立場を含めた対応規則の拡充が望まれる。

⁵抽出の実施にあたって、(株)東洋情報システムの方々のご協力を得た。記して感謝したい。

9 サンプル対話の提示

ここでは「国際会議の参加に関する問い合わせ対話」の発話クラスターがどのように構築されるのかについて、実際の対話を1例提示する。

対話例

-
- 質問者： もしもし、
通訳電話国際会議事務局ですか？
- 事務局： はい、
そうです。
- 質問者： 会議に申込みたいのですが。
- 事務局： はい、
登録用紙はすでにお持ちでしょうか？
- 質問者： いいえ、
まだです。
- 事務局： 分かりました。
それでは、こちらからお送り致しますので、お名前とご住所を、お聞かせ願えますか？
- 質問者： はい、
大阪市北区茶屋町6の23、
鈴木真弓です。
- 事務局： はい、
分かりました。
では、至急にご送らせていただきます。
もし、何かわからない点がございましたら、こちらの方へ、いつでもお聞きください。
- 質問者： よろしくお願ひします。
参加料はいるのでしょうか。
- 事務局： はい、
登録料としてお一人1万6千円です。
- 質問者： どのようにお支払したらよいのですか？
締切はいつですか。
- 事務局： こちらからお送りする登録用紙に詳しい内容が明記されておりますが、費用は銀行振込です。
そして期限の方ですが、今年いっぱいとなっております。
- 質問者： 会議で使われる言葉は、日本語だけですか？
英語には、余り自信がないのですが。
- 事務局： 今回の会議は国際会議で、外国からの参加者もかなりおられますので、使用言語は一応、英語となっております。
けれども会議の際同時通訳がつきますので、英語に自信のない方でも、日本語で話を聞くことができますから、ご心配いらないかと思ひます。
- 質問者： 学生を20人ほどつれて行きたいのですが、料金の割引はないでしょうか。
- 事務局： 学生の方に関しましては、登録料は1万円となっておりますが、
団体割引というようなことはあいにくですが、今回は行っておりません。
- 質問者： わかりました。
申込用紙を21部送ってください。
- 事務局： はい、
失礼いたしました。
21部とも先ほどのご住所にお送りすればよろしいでしょうか？
- 質問者： はい、
お願ひします。
それでは失礼します。
- 事務局： はい、
どうも失礼致します。
-

情報伝達行為の推定

本稿の規則ないし記述を用いれば、情報伝達行為は以下のように推定される。

質問者：もしもし、

通訳電話国際会議事務局です か？

GreetingOpen (7章 R-27)

Confirm-Value

(「か」で終わっているので R-52より Confirm。「固有名詞+ですか」なので 3.2.2.6 節の T-1 により Confirm-Value)

事務局：はい、

InformAffirmative-Value (R-29)

(直前が Confirm-Value なので InformAffirmative-Value と推定)

そう です。

Inform (R-51)

(但し [話題の属性] はこの時点では不明)

質問者：会議に申込みたい のですが。

Inform-Statement

(R-51 により Inform。さらに「たい」が前接しているので T-2 より Inform-Statement)

事務局：はい、

Aiduchi (R-29)

(直前が Inform なので Aiduchi と推定)

登録用紙はすでにお持ちでしょう か？

Confirm-Statement

(R-52により Confirm。「お [連用名詞] です」が前接しているので T-3 より Confirm-Statement)

質問者：いいえ、

InformNegative-Statement

(R-43により InformNegative。直前が Statement なので InformNegative-Statement と推定)

まだ です。

Inform-Statement

(R-51により Inform。さらに Confirm-Statement 発話と発話クラスターを構成すると推定して [話題の属性] は Statement)

事務局：分かりました。

それでは、こちらからお送り致しますので、
お名前とご住所を、お聞かせ願えますか？

質問者：はい、

大阪市北区茶屋町6の23、

鈴木真弓です。

事務局：はい、

分かりました。

では、至急に送らせていただきます。

もし、何かわからない点がございましたら、
こちらの方へ、いつでもお聞きください。

質問者：よろしく願います。

参加料はいるのでしょうか。

Understand (R-31)

Ask-Value

(「か」で終わっているので R-52 により、直接的には Confirm。そして「願える」という可能の要素が生起しているので T-9 より Statement と推定。つまり Confirm-Statement。間接的には R-48 により RequestPromise-Action。さらに間接的には R-52 により Ask-Value。3.2.2.3 節より、2つの Ask-Value を果たしていることになる)

InformAffirmative-Statement

(直前の発話が直接的に果たす Confirm-Statement と対応する InformAffirmative-Statement と推定。これは 3.2.2.5 節による)

Inform-Value

(T-1 より [話題の属性] が Value と推定。さらに次の発話が「です」で終わっているので R-51 より Inform と推定して Inform-Value)

Inform-Value

Understand

(直前が Inform なので Understand か Aiduchi と推定されるが、Inform 発話は事務局の要請によるものだから、Understand と推定)

Understand (R-31)

Offer-Action (R-25)

Offer-Action (R-21)

Yoroshiku (R-47)

(この発話は直前の2つの Offer-Action 発話と発話クラスターを構成する)

Confirm-Statement

(R-52 により Confirm。さらに T-5 より Confirm-Statement)

事務局：はい、

登録料としてお一人1万6千円です。

質問者：どのようにお支払したらよいのですか？

締切は いつですか。

事務局：こちらからお送りする登録用紙に、詳しい内容が明記されておりますが、費用は銀行振込です。

そして期限の方ですが、今年いっぱいとなつております。

質問者：会議で使われる言葉は、日本語だけですか？

英語には、余り自信がないのですが。

事務局：今回の会議は国際会議で、外国からの参加者もかなりおられますので、使用言語は一応、英語となつております。

InformAffirmative-Statement

(直前が Confirm-Statement なので Inform-Affirmative-Statement と推定)

Inform-Value

(「です」で終わっているので Inform と推定。さらに直前が値なので T-1 より Inform-Value)

Ask-Action (R-3)

Ask-Value

(R-52により Ask。さらに T-1 より Ask-Value)

Inform-Action

(R-51により Inform。さらに直前の発話が Ask-Action なので Inform-Action と推定。もちろん、直前の発話を Ask-Value ととる可能性もあるが、[銀行振込] という名詞句の内容からして、T-4 に沿えば Action が望ましい)

Inform-Value

(R-51により Inform。さらに直前の発話が Ask-Value なので Inform-Value と推定)

Confirm-Value

(R-52により Confirm。さらに直前に固有名詞がきている (副助詞ダケはのぞく) ので、T-1 より Confirm-Value)

Inform-Statement

(R-51により Inform。さらに T-8 より Inform-Statement)

Inform-Statement (R-51)

事務局：けれども会議の際、同時通訳がつきますので、英語に自信のない方でも、日本語で話を聞くことができますから、 <u>ご心配いらな</u> いかと思います。	Inform-Statement (R-51により Inform。「かと思
質問者：学生を20人ほどつれて行きたいのですが、料金の割引はないでしょう <u>か</u> 。	Confirm-Statement (R-52により Confirm。さらに「で
事務局：学生の方に関しましては、登録料は1万円と なっておりますが、 団体割引というようなことはあ	Inform-Statement (T-6 より) InformNegative-Statement (T-6 より)
事務局：学生の方に関しましては、登録料は1万円と なっておりますが、 団体割引というようなことはあ	InformNegative-Statement (T-6 より)
質問者：わかりました。	Understand (Inform 発話の直後なので Understand と推定)
事務局：はい、 申込用紙を21部送っ <u>て</u> ください。	RequestPromise-Action (R-18) Promise-Action (R-29と、直前の発話が RequestPromise- Action であることにより Promise-Action)
事務局：はい、 承知いたしました。 21部とも先ほどのご住所にお送り すればよろしい <u>で</u> しょうか？	Promise-Action (同上) Confirm-Action (R-6) InformAffirmative-Action (直前が Confirm-Action なので Inform- Affirmative-Action)
質問者：はい、 <u>お</u> 願いします。	Yoroshiku (R-47) (この Yoroshiku 発話は、Yoroshiku 発 話が後続しないため、単独で発話クラ スターを形成する。2.2節参照)
事務局：はい、 それでは <u>失</u> 礼します。	GreetingClose (R-30) GreetingClose (R-29の規則) GreetingClose (R-30)
事務局：はい、 どうも <u>失</u> 礼致します。	GreetingClose (R-30)

10 おわりに

本稿で行ったことは、以下の5点に集約される。これらは何らかの形で、今後の対話処理研究の貢献となれば幸いである。

1. これまで提唱されてきた情報伝達行為・発話対・発話スタック・間接応答等の概念に対し、必要な修正および補足を加え、実際に大量のデータを処理するためのそれらの基本的且つ具体的なあり方を提示したこと。
2. これまで（情報処理・日本語学の領域を問わず）ほとんど記述されなかった、情報伝達行為ないし発語内行為の視点から見た対話構造を、ごく基本的な領域にとどまるにせよ記述し、文形式と情報伝達行為との対応規則に細かな制限を加えたこと。
3. これまでの（暗黙の）理念であった、発話文と情報伝達行為との1対1対応の限界を示したこと。
4. これまであまり重要視されなかった、[平叙文/疑問文/命令文]という表層的な文区分が、情報伝達行為の割り出しにとって有用であることを示したこと。
5. 文を構成する節も文と同様、情報伝達行為を果たすと考えることで、いくつかの接続助詞やその他の語句の生起可能性を限定できることを明らかにしたこと。

参考文献

- [有田・飯田 1987] 有田英一・飯田仁 1987 「日本語対話の構造とその解析法」 (情報処理学会第35回全国大会発表)
- [有田・飯田 1989] 有田英一・飯田仁 1989 『対話翻訳のための階層型プラン認識モデル』 ATR自動翻訳研究所 TR-1-0067.
- [有田他 1991] 有田英一・山岡孝行・飯田仁 1991 「電話対話における次発話内の名詞句表現の予測」 『自然言語処理』 81-13,95-102.
- [飯田 1990] 飯田仁 1990 「コンピュータ言語学における談話構造分析」 『言語』 vol. 19, No. 4, 68-75.
- [飯田・相沢 1989] 飯田仁・相沢輝昭 1989 「意図の理解」 『情報処理』 vol. 30, No. 10, 1216-1223.
- [飯田・有田 1990] 飯田仁・有田英一 1990 「4階層プラン認識モデルを使った対話の理解」 『情報処理学会論文誌』 第31巻第6号, 810-21.
- [大曾 1986] 大曾美恵子 1986 「「今日はいい天気ですね。」 - 「はい、そうです。」」 『日本語学』 第5巻第9号,91-4. 明治書院.
- [郡司 1990] 郡司隆男 1990 「日本語句構造文法」平成元年度文部省科学研究費補助金総合研究(A) 『自然言語処理の高度化に向けて』,9-28.
- [田窪 1987] 田窪行則 1987 「統語構造と文脈情報」 『日本語学』 5.,37-48.
- [仁田 1991] 仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房.
- [沼田 1989] 沼田善子 1989 「とりたて詞とムード」 『日本語のモダリティ』くろしお出版.
- [橋本他 1990] 橋本一男・小倉健太郎・江原暉将・森本逞 1990 「自動翻訳電話研究用言語データベースの構成」 ATR自動翻訳電話研究所 TR-I-0150
- [橋本他 1990] 橋本一男・小倉健太郎・森本逞 1990 「言語データベース ADD の検索システム」 ATR自動翻訳電話研究所 TR-I-0153
- [橋本 1990] 橋本一男 1990 「ADD 検索システム利用概説書」 ATR自動翻訳電話研究所 TR-I-0154
- [益岡 1987] 益岡隆志 1987 『命題の文法』くろしお出版.
- [益岡近刊] 益岡隆志 近刊 『モダリティの文法』くろしお出版.
- [三上 1963] 三上章 1963 『日本語の構文』くろしお出版.
- [三上 1972] 三上章 1972 『現代語法序説』くろしお出版.

- [南 1974] 南不二男 1974 『日本語の構造』大修館書店.
- [山岡 1990] 山岡孝行 1990 「素性構造意味表現からの情報伝達行為推論」 (発表要項)
- [山岡・飯田 1990] 山岡孝行・飯田仁 1990 「文脈を考慮した音声認識結果絞り込み手法」 情報処理学会自然言語処理研究会資料 78-16
- [山梨 1984] 山梨正明 1984 「対話理解の基本的側面」 『対話行動の認知科学的研究』.
- [山梨 1986] 山梨正明 1986 『発話行為』. 大修館書店.
- [Cohen1984] Cohen, P.R. 1984 "The Pragmatics of Referring and the Modality of Communication", Computational Linguistics Vol.10, No.2, 97-146.
- [Grosz1986] Grosz, B.J. 1986 "Attention, Intention, and the Structure of Discourse", Computational Linguistics, Vol. 12, No. 3, 175-204.
- [Iida et al 1990] Iida, H., Yamaoka, T. and Arita, H. 1990 "Three Typed Pragmatics for Dialogue Structure Analysis", COLING'90.
- [Searle1975] Searle, J.R. 1975 "Indirect Speech Acts", Syntax and Semantics 3, Academic Press.
- [Yamaoka1990] Yamaoka, T. and Iida, H. 1990 "A Method to Predict the Next Utterance Using a Four-layered Plan Recognition Model", ECAI'90.

お詫びと追加訂正

TR-I-0220(表題『協調的な目標指向型対話における文形式と発話者の意図との対応－文形式を重視した情報伝達行為の分類－』, 英表題 “Connections Between Surface Sentence Forms and Speaker’s Intentions in Cooperative Task-Oriented Conversations – Classification of Communicative Acts Relied on Surface Forms –”)におきまして、以下の2箇所が抜けていましたので、お詫びして追加訂正致します。

1. 第7章「情報伝達行為と文形式の対応規則」(p47)本文6行目の下に、規則中の略号の紹介(別紙 I,II)の追加。
2. 『謝辞』(別紙 III)の追加。

VN: | 漢語動詞語幹 (例. 確認) |
| 外来語動詞語幹 (例. サイン) |

オVN: | お + 和語動詞連用形 (例. お話し) |
| ご + 漢語動詞語幹 (例. ご確認) |
| 外来語動詞語幹 (例. サイン) |

但し、慣用度の高いごく少数の漢語動詞語幹は、和語として扱う。(例. お電話)

V: 動詞

V': V 末尾から末尾の可能な形態素 (r)areru を除いた語基動詞

V&: | V |
| V' わけに (は) 参る / 行く |

マス &: ます / ません

デス &: です / でしょう

疑問: 疑問詞

但し、[疑問詞 + か] (例. 誰か)、[疑問詞を含む構成要素 + か] (例. 何日に開催されるか) 等における疑問詞は「疑問」に含まないものとする。

疑問なし: 疑問詞の生起しないことを表す

但し、[疑問詞 + か] (例. 誰か)、[疑問詞を含む構成要素 + か] (例. 何日に開催されるか) 等における疑問詞は「疑問なし」に含むものとする。

可能: える / れる / られる

モラエル &: | 貰える & |
| 頂ける & |
| 下さる & |

ヨイ: よい / よろしい / 構わない / 結構です

バ: | ば |
| と |
| (まし)たら |
| なら |

ナイデス: | ない(もの)です & |
| ます(でしょう) |
| ません(でしょう) |
| でしょう |

カ: か / ね (+ 終助詞)

ウレシイ:	幸い	で(ございま)す	(接続助詞)(終助詞)。
	好都合	(なん)	
	結構		
	有難い	(ん)	
	嬉しい	ございます	
	助か	ります	
		るんです	

∴。/?

シテ:	動詞連用形 + て
	オVN
	VN

VAL:	(住所や名前他を表す) 名詞句
	終助詞「か」で終わる Ask 系疑問文
	終助詞「か」で終わる Confirm 系疑問文(+どうか)

聞カセテ:	聞かせ / 知らせ / 教え / 仰っ	+ て
	お + 聞かせ / 知らせ / 教え	
	ご 教示	(+して)

やり方ヲ:	行為名詞 + の	手順	
	～する(ような / みたいな)	方法	を
		やり方	
	動詞連用形 + 方		を
	疑問 ～バいい(の)か		(を)

謝辞

研究の機会を与えて頂きました西田龍雄先生（京都大学）・壇辻正剛先生（関西大学）・家本太郎先生（京都大学）に深謝致します。またさまざまな面でお世話になりましたATR自動翻訳電話研究所言語情報処理研究室の皆様にお礼申し上げます。